

城ノ原遺跡

福岡県八女郡黒木町所在遺跡の発掘調査報告書

黒木町文化財調査報告書

第2集

1995

黒木町教育委員会

じょう の はる
城 ノ 原 遺 跡

福岡県八女郡黒木町所在遺跡の発掘調査報告書

1995

黒木町教育委員会

序

大洲小学校は1874年に創設され120年を経過しており、現在の校舎は落成より40年近くたとうとしています。当小学校は大洲地区の教育機関としての役割を果たしてきました。

しかし、校舎の老朽化がひどく、町では校舎改築を計画し、その用地として今回発掘致しました場所を選定したところであります。

今回の城ノ原遺跡の発掘においては、平成5年度の試掘調査の結果、土器の破片数点と集落跡が発見されたため、平成6年度事業において本格的な発掘調査を実施しました。

なお、発掘調査に際しましては、例年になく小雨のため炎天下での発掘となり、県教育委員会・専門調査の各先生方のご指導・ご助言を賜り、また地元の方々の多大なご協力を受けました。ここに心から厚くお礼申し上げます。

今後はこの報告書に基づき、大洲小学校をはじめ多数の人々への文化財の保護及び愛護思想に役立つものと確信いたしております。

平成7年3月31日

黒木町教育委員会

教育長 中原 武

例言

1. 本書は、黒木町が平成6年度に黒木町立大淵小学校の改築工事に先だって発掘調査を行った遺跡の報告であって、黒木町文化財調査報告書の第2集にあたる。
2. 発掘調査は黒木町教育委員会が主体となり、福岡県教育庁南筑後教育事務所の援助を受けて実施した。
3. 調査中の遺構については、実測は伊崎俊秋・内藤啓介が行い、水本宮子・浦部幸子・中川寿賀子の援助を受けた。写真は伊崎が撮影した。
4. 気球写真はフォトオオツカに委託した。
5. 出土遺物については、実測は平田春美・棚町陽子・久富美智子・岡由美子・田中典子・坂田順子・堀江圭子・江口幸子・堀之内久美子・山本千鶴美・伊崎俊秋が行い、写真は北岡伸一が撮影した。
6. 遺構・遺物の図面の浄書は豊福弥生・原カヨ子・関久江・土山真弓美と伊崎が行った。
7. 挿図における方位は磁北である。
8. 本文中の挿図・写真図版において、遺構は掘立柱建物跡をS B、土壌をS K、段落ちをS X、ピットをPの略号とした。
9. 本書の執筆・編集は伊崎が行った。

目次

I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 調査の内容	6
A. I 区の調査	8
1. 近世の遺構と遺物	8
a. 掘立柱建物跡	8
b. 石室	9
c. 土壌	13
d. その他	22
2. 縄文時代の遺構と遺物	27
a. 土壌	27
b. その他	30
B. II 区の調査	34
a. 土壌	34
b. 溝	35
IV. おわりに	35

図版目次

PL. 1	1. 城ノ原遺跡遠景 (西から)	2. 城ノ原遺跡と大淵小学校 (西から)
PL. 2	1. 城ノ原遺跡遠景 (南東から)	2. 城ノ原遺跡気球写真 (西から)
PL. 3	城ノ原遺跡Ⅰ区全景	
PL. 4	1. Ⅰ区東半気球写真	2. Ⅰ区SB1・2等
PL. 5	1号石室 (1. 南から, 2. 西から, 3. 北から)	
PL. 6	1. SK1~4 (南から)	2. SK4~17 (西から)
	3. SK9~17 (南から)	
PL. 7	1. SK7 (南から)	2. SK12 (北から)
	3. SK18~20 (西から)	
PL. 8	1~4. Ⅰ区北斜面近世墓 (北から)	5. Ⅰ区1・2トレンチ (南西から)
PL. 9	1. Ⅱ区全景 (南から)	2. Ⅱ区 (北から)
	3. SK31 (北東から)	
PL. 10	城ノ原遺跡出土遺物 1	
PL. 11	城ノ原遺跡出土遺物 2	
PL. 12	城ノ原遺跡出土遺物 3	
PL. 13	城ノ原遺跡出土遺物 4	
PL. 14	城ノ原遺跡出土遺物 5, 大淵小学校所蔵石器, 池の本・鹿子生焼窯跡採集遺物	
PL. 15	池の本・鹿子生・釈形焼窯跡採集遺物	
PL. 16	1. 馬渡遺跡出土土器	2. 作業風景
	3. われら総勢14人	

挿図目次

Fig. 1	黒木町城ノ原遺跡周辺遺跡分布図 (1/50000)	3
Fig. 2	池の本焼・鹿子生焼・釈形焼窯跡採集遺物実測図 (1/3)	5
Fig. 3	城ノ原遺跡調査区位置図 (1/1500)	6
Fig. 4	城ノ原遺跡採集石器 (大淵小学校蔵) 実測図 (1/3)	7
Fig. 5	城ノ原遺跡Ⅰ区北斜面近世墓墓標拓影 (1/4)	8
Fig. 6	城ノ原遺跡Ⅰ区遺構配置図 (1/200)	9
Fig. 7	SB1・2実測図 (1/60)	10
Fig. 8	1号石室実測図 (1/40)	11
Fig. 9	1号石室出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 10	SK1・3・12・18・20・21実測図 (1/40)	16
Fig. 11	SK6~8, P3~6実測図 (1/40)	17
Fig. 12	SK9~11・17実測図 (1/40)	18
Fig. 13	SK13~16実測図 (1/40)	19

Fig. 14	S K 25・26・28・30実測図 (1/40)	21
Fig. 15	S K 3 出土遺物実測図 (1/3)	22
Fig. 16	S K 6～10・12・15～18・20出土遺物実測図 (1/3)	23
Fig. 17	S K 25・26・28・30出土遺物実測図 (1/3)	24
Fig. 18	ピット等出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig. 19	接合資料実測図 (1/3・1/6)	26
Fig. 20	城ノ原遺跡出土鉄器実測図 (1/2)	27
Fig. 21	縄文時代S K 2・4・5・19・22～24実測図 (1/40)	29
Fig. 22	縄文時代S K 27・29・31実測図 (1/40)	30
Fig. 23	城ノ原遺跡I区1・2トレンチ土層図 (1/60)	31
Fig. 24	城ノ原遺跡出土縄文土器実測図1 (1/3)	32
Fig. 25	城ノ原遺跡出土石器実測図1 (1/1,1/4)	33
Fig. 26	城ノ原遺跡出土石器実測図2 (1/3)	33
Fig. 27	城ノ原遺跡II区遺構配置図 (1/300)	34
Fig. 28	城ノ原遺跡II区A・Bトレンチ土層図 (1/60)	34
Fig. 29	S K 32実測図 (1/40)	35
Fig. 30	II区出土遺物実測図 (1/3)	35
Fig. 31	城ノ原遺跡出土縄文土器実測図2 (1/3)	35
Fig. 32	城ノ原遺跡近世・縄文の遺構 (1/300)	36

I. はじめに

八女郡黒木町立大淵小学校は明治7(1874)年に創立され、平成6(1994)年で120周年を迎えた歴史のある学校である。現在の校舎は昭和31(1956)年に落成したものでかなり老朽化が進んでいた。そこで町としては校舎の解体新築について平成2年から企画立案し、同6年度に造成工事を行い、7年度に校舎を、8年度に体育館を新築する予定で計画を進めていた。

この計画について、南筑後教育事務所では、当該地は埋蔵文化財が遺存するかも知れないので造成工事に先だって遺跡の有無の確認をして後に計画を進めるようにとの指導を行った。それを受けて町では平成5(1993)年11月15日に試掘調査を実施したが、造成予定地内の一部において縄文時代の土壌・柱穴と弥生土器を検出したのであった。この結果をもとに、町教育委員会は削土される部分について発掘調査を行うこととし、南筑後教育事務所と協議を重ね、平成6年度の上半期には調査にとりかかることとした。

発掘調査は6月16日から重機にて表土剥ぎを始めた。折しも梅雨に入っていて先行きが危ぶまれるような天候状態であったが、雨は当初の数日間のみで、あとは渇水の前兆となる炎天下にての調査となった。掘る作業は21日から始めておおむね順調に進捗し、途中の中断をはさんで約2週間で終了した。調査中には大淵小学校3～6年生の野外授業もあった。

調査期間：平成6(1994)年6月21日～7月14日

調査面積：約1790m²

調査箇所は、小学校の校庭にある標示柱に北緯33°10′、東経130°44′と記されており、座標値ではⅠ区中心がX=19.690km, Y=-25.755km、Ⅱ区中心がX=19.600km, Y=-25.770kmである。

調査の関係者は次のとおりである。

黒木町教育委員会

教 育 長 中 原 武

社会教育課 課 長 大 谷 広 人

主 査 小 柳 友 博

主 事 溝 尻 安 寿 子

用 務 員 中 村 文 廣

福岡県教育庁 南筑後教育事務所 生涯学習課

係 長 堤 保 光

主 査 井 上 竜 児

書 記 補 内 藤 啓 介

体育指導員 檜 室 修 一

技術主査 伊 崎 俊 秋

調査中および報告書作成においては、多くの方々にお世話になった。感謝致します。

片山 輝行・藤島 典子(大淵小学校)、秀徳 高(学びの館)、樋口 一邦、石井 忠孝・濱田 信也・砥上 廣明・稲益 則久・上川 靖彦・原 佳子・大津 重明・黒田 謙和・梅崎 雄二・江上 靖則・小野 智明・堤 純雄・東 勝典(南筑後教育事務所)

[発掘調査従事者]

大 淵 肇・坂 田 米 雄・片 山 譲 治・大 淵 和 喜 子・五 條 光 子・水 本 米 子
水 本 宮 子・北 川 道 子・浦 部 幸 子・水 本 ヒデ代・月 足 清 美・片 山 千 代 香

II. 遺跡の位置と環境

(Fig. 1)

(所在地)

福岡県八女郡黒木町大字大淵4005ほか

城ノ原遺跡は、黒木町をほぼ東西に貫流する矢部川が、日向神ダムから西流してきて大淵で北に向きを変える所、そこは北流してきた剣持川が合流する所でもあるが、その直前の南岸、標高158～160mほどの山あいの段丘上に位置する (Fig. 1)。周辺は山また山であり、南方は西から東へと男岳 (標高532m)・姫御前岳 (596m)・雄岳 (562m)・やさぶ岳 (642m)・星原山 (793m)・休鹿山 (866m) と続いて熊本県と境をなし (PL.1)、三国山 (994m) に至って大分県境となる。北方は高峰 (567m)・大山 (599m) から東へ竹山 (905m)・石割岳 (942m) と続いてのち矢部村を経て大分県境になる。

黒木町の様相

黒木町は、福岡県の南部にあり、九州脊梁山脈から派生した筑肥山地と総称される山間部に位置する。町の西端部から少し下ると八女市になり、平野部が開けてくる。

町の中央を東西に流れる矢部川は、矢部村の御前岳・三国山あたりを源とし、星野川や迎春川・白木川などを集めて西南流してのち有明海に注ぐ流路延長61kmの県下第二の河川である。

黒木町は、昭和29 (1954) 年4月1日に、それまでの黒木町・豊岡村・串毛村・木屋村・笠原村の五町村が合併して黒木町となり、その後、昭和32 (1957) 年に大淵村を編入合併して黒木町となって現在に至っている。町の総面積約135.5km²は福岡県下では北九州市・福岡市・甘木市に次ぐ4位の広さを持ち、町としては県下最大である。東は矢部村、北は星野村・上陽町、西は八女市・立花町、南は熊本県鹿北町と境界を接する。

大フジや霊巖寺の奇岩 (通称・珍宝岩) などの自然的観光資源に加えて、大規模年金保養基地・グリーンピア八女が1986年にオープンしてから観光客誘致にも力を入れているが、人口は16492人 (1994年5月31日現在) で減少傾向にあり、過疎化が進んでいる。

町の総面積の約67%にあたる90.61Km²は山林であって、耕地は矢部川沿いにみられるのみである。町の名産品にはお茶のほかにおどろ・なす・すもも・なし・たけのこなどの野菜や果物がある。

黒木町の指定文化財としては、国2件、県9件、町30件がある。国指定の重要文化財 (書跡) である五條家文書17巻は南北朝時代に征西將軍宮懐良親王に従って九州に下った五條氏にまつわる史料群であり、特に九州の南朝方の研究には欠かせない貴重な文書である。その文書を伝える五條家は今回調査した城ノ原遺跡南方の山裾にあり (PL. 1-2の中央右端)、建造物として黒木町指定有形文化財となっている。また国指定天然記念物の「黒木のフジ」は樹齢約600年といわれ、毎年4月下旬には紫色の大きな房を垂下させる。

県指定には木造聖観音立像、田代の風流、旭庵人形芝居、猫尾城跡、津江神社の樺、雲長寺の彼岸桜、荒谷のカエデ、霊巖寺の奇岩、空室のカツラがあり、天然記念物が多いのが特徴であるが、これらの植物には雲長寺の彼岸桜のように枯死したものや樹勢の衰えてきたものも見られ、今後の保存対策が課題となっている。

1. 城ノ原遺跡
2. 熊野覚城跡
3. 熊野神社
4. 中村遺跡
5. 本田遺跡
6. 釈形焼窯跡
7. 今村焼窯跡
8. 鹿子生焼窯跡
9. 池の本焼窯跡
10. 黒木小学校校庭遺跡
11. 薮華城跡
12. 峯切山陣跡
13. 高城跡
14. 猫尾城跡
15. 野田山遺跡
16. 馬渡遺跡
17. 大念塚遺跡
18. 大念塚修驗道遺跡
19. 田本上ノ山遺跡
- A. 黒木の大フジ
- B. 津江神社の大樟
- C. 荒谷のカエデ

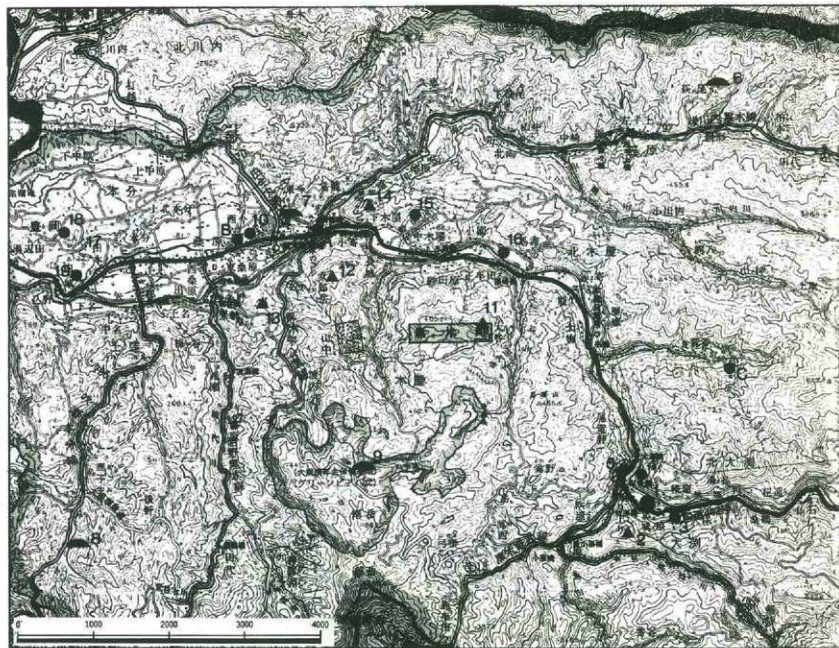


Fig. 1 黒木町城ノ原遺跡周辺遺跡分布図 (1/50000)

なお、余談であるが、黒木町には難解な読みの地名が多々ある。たとえば左上(さんじゃき)、鶯野(おおの)、鶯西(おにし)、釈形(しゃかた)、鹿子生(かこお)、弓掛(にがき)等々である。何に由来するのであろうか。

歴史的環境 (Fig. 1)

黒木町の歴史的流れについては先年刊行された『黒木町史』(以下『町史』)に詳しく、考古学的分野でも特に原始・古代について概説と町内の採集資料の紹介がなされている。以下、『町史』と『福岡県遺跡等分布地図』(以下『分布地図』)を参照しつつ町内の遺跡を概観しておこう。

旧石器時代は、平野・熊ノ内、高石原の2遺跡でナイフ形石器が採集されているというが、この時代については今後の研究に期待するところが大きい。

縄文時代は、『町史』ではおもに黒木高等学校に所蔵されている6遺跡の遺物紹介を行い、別に9カ所の遺跡名を挙げている。馬渡遺跡は圃場整備事業に伴う試掘調査で発見された遺跡であるが、削土を行わない工法に変更したうえで盛土し保存されている。試掘によるものなので遺物も多くはない(PL. 16)。城ノ原遺跡での縄文時代の遺構・遺物の検出は特記してよいものとなろう。大洞小学校にはFig. 4に示す石器が所蔵されており、城ノ原遺跡の周辺で採集されたものという。これについては後述する。

弥生時代では『町史』に3遺跡が紹介されるが、そのうちの田本上ノ山遺跡の小形仿製鏡は注意されよう。城ノ原遺跡でも遺構は明確でなかったが弥生後期土器が出土したことは、該期の集落が近在することを示しているのだろう。

古墳時代については、『町史』にもあるように今のところ黒木町では全く様相がわからない。今後の調査の進展に期待するしかない。

奈良時代以降についても考古学的に多くの情報はないが、平安時代とされる大念塚跡群、宋・明銭の発見された野田山遺跡、16世紀代の遺物が多数採集されている峯切山遺跡、時期不詳ながら今に礎壇を残す大念塚修験道遺跡などは注意を要する遺跡である。また、山城については猫尾城が整備に向けて発掘調査を行っており、14世紀から17世紀までの遺物が出土している。町内にはまだいくつかの山城が存在したといわれ、『分布地図』によれば城ノ原遺跡の南方にも熊野党城跡があるもののその実態は不明である。

江戸時代において、矢部川をはさんで北側は久留米・有馬藩、南側は柳川・立花藩に属していた。その両藩内で陶磁器を焼いた窯跡がいくつか知られている。有馬藩領内の今村焼・釈形焼であり、立花藩領内の鹿子生焼・池の本焼である。今村焼窯跡を除いていずれも窯跡はまだ現地に一部が遺存しているようである。これらについては『筑後陶芸考』・『黒木町史』に紹介があり、ことに前者では窯が存した年代や承継関係についても考察を及ぼされている。採集された陶磁器と窯道具等からすれば(PL. 14・15, Fig. 2)、釈形焼はやや古く、鹿子生焼・池の本焼おそらく19世紀以降の操業と思われる。これらが藩が関与した窯であったのか、あるいはまったくの民窯であったのかなど、今後文献ともあわせて解明すべき点は多い。

城ノ原遺跡の東南方の丘の上に鎮座する熊野神社には3対の石灯籠があり、天明6年(1786)、天保3・14年(1832・43)の紀年がある。

なお、圃場整備事業に関連して平成5(1993)年11月15日には田本地区、同6(1994)年11月30日には鹿子生地区の試掘調査を行ったが、いずれも遺構は確認されなかった。

註 参考文献については巻末参照。

III. 調査の内容

〈概要〉

前年度の試掘では新たな校舎及び運動場建設予定地内の8カ所にトレンチを設定したが、それによると現校舎のある東側から西へと微高地があり、北西端部から南西端部にかけては砂礫層を基盤とする氾濫原であったと捉えられた。この所見をもとに、校舎建築予定箇所と運動場予定地の削土部分について調査区を設定することとし、北側をⅠ区、南側をⅡ区とした (Fig.3)。

Ⅰ区は調査前の標高が158.65~79mである。約830m²を調査した。掘立柱建物跡2棟、土壇31基のほか土器等の出土したビット22個と無遺物のビット多数があった。試掘段階で弥生土器が検出されていたのでその時期の遺構を期待していたが見つからなかった。建物跡と土壇の多くは調査区の東半部に集中し、中ほどに空白地をおいて、あと西端から南端の周縁に分布している。北西端部には段落ちの所があった。調査区東半部の南端寄りには東西方向に小ビット群が並んでいるようにも見

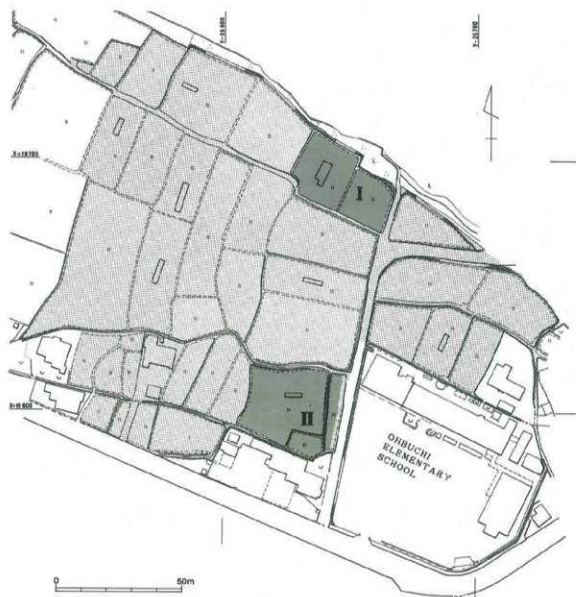


Fig. 3 城ノ原遺跡調査区位置図 (1/1500)

えたが、建物とはならないので、あるいは柵列か垣根のようなものの痕跡かも知れない。これらの大半は近世期の遺構であって陶磁器類を出土しているが、土壌のいくつかには縄文時代のものがある。遺物の出土していないものは縄文時代の項で説明する。上記の空白地には1~4トレンチを設けて掘り下げたところ縄文土器片が出土した。

先にふれた大洲小学校蔵の石器(PL.14, Fig.4)はI区東南方の道を造る際もしくはその周辺で出土したものである。1~7は蛇紋岩または安山岩質の石材による磨製石斧である。1は完形で全長10.4cm。2は頭部を欠失するもので両側面には敲打痕が見られる。1~3は器表に自然面を残している。4はスマートな形状をなし、頭部を欠失するも長さはもうあまり延びないものと思われる。現存長は15cm。5は完形で長さ11cm。6は細身で器表に粗い擦痕が見られる。7は扁平気味で全長8.7cm。8は片岩の扁平石器で、刃部があることから局部磨製の石斧ともみてとれるが、頭頂部とその下の両側面に挟りがあり、石錘としたほうがよいのかもしれない。

なお、ここの北側の矢部川に面した斜面は茶畑に開墾されているが、そこに近世の墓標が3基立っていた(PL.8, Fig.5)。そのうちの2基は延享2年(1745)と宝暦13年(1763)の年号が刻まれている。

II区はI区の60~70mほど南方にある。I区よりも標高が高く、160.03~63mであった。約960㎡の調査区内に検出された遺構はきわめて少なく、土壌1基と小さい溝、そして北半部に小ピット群があったのみである。

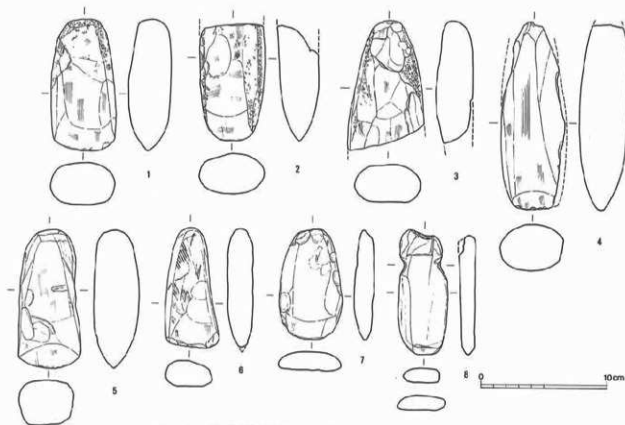


Fig.4 城ノ原遺跡採集石器(大洲小学校蔵)実測図(1/3)

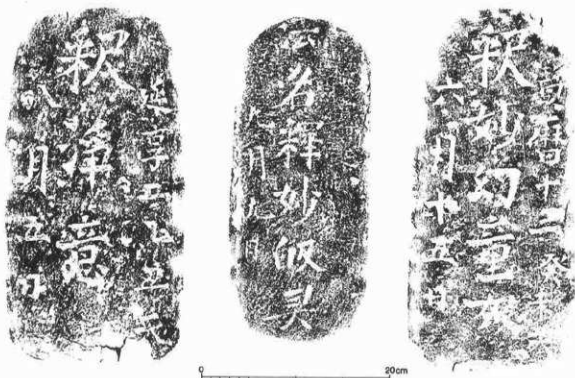


Fig. 5 城ノ原遺跡 I 区北斜面近世墓標拓影 (1/4)

A. I 区の調査

1. 近世の遺構と遺物

a. 掘立柱建物跡

調査区の中央やや東寄りの北端に 2 棟が重複して検出された。2 棟ともに柱並びが整然としておらず、建物の存在そのものに不安がないでもないが、周辺における土壌群のあり方を勘案すればここは建物として捉えておく。また、SK 6 の周辺に P 3～5 が並び、SK 8 の横にも並ぶような柱穴があるが、この両者が対になる配置ではない (Fig. 11)。ただこれが SK 6・8 を含めた何らかの建物的なものであった可能性はある。

SB1 (PL.3・4, Fig. 7)

梁行 270cm、桁行 570cm の規模で、北東部は SB 2 と重複する。南辺の梁行は中央の柱穴が見あたらず、その辺上に SK 11 が重複している。柱穴はおおむね深みのあるしっかりしたものである。主軸方位は N-35.5° - E。出土遺物はない。

SB 2 (PL.3・4, Fig. 7)

梁行 310cm、桁行 440cm の規模で、これも南辺の梁行中央の柱穴が見あたらない。桁行東辺が SK 7 と重複している。主軸方位は N-32.5° - E。出土遺物はない。

b.石室 (PL.3・5, Fig. 8)

SB1・2の南方から検出された石室である。「せきしつ」ではなく「いしむろ」とする。掘り始めた当初は古墳時代の竪穴式「石室(せきしつ)」かと思い、「黒木町で初めての古墳か」と小躍りし

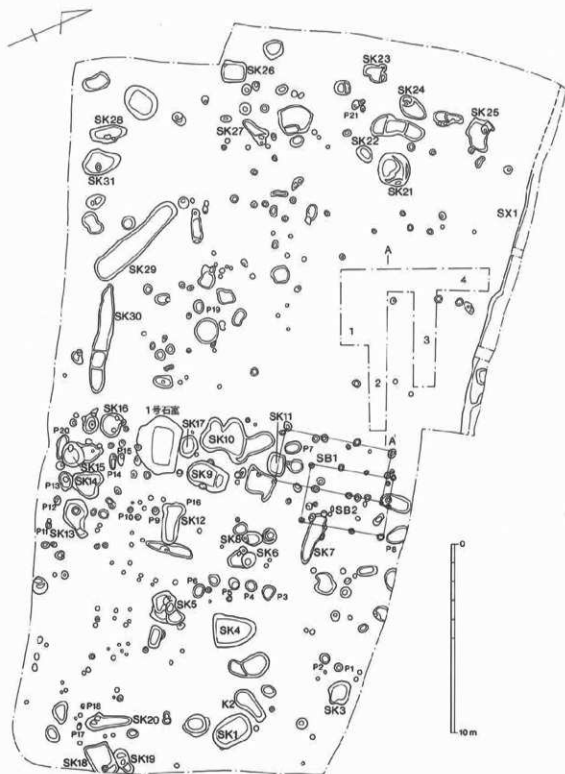


Fig. 6 城ノ原遺跡I区遺構配置図 (1/200)

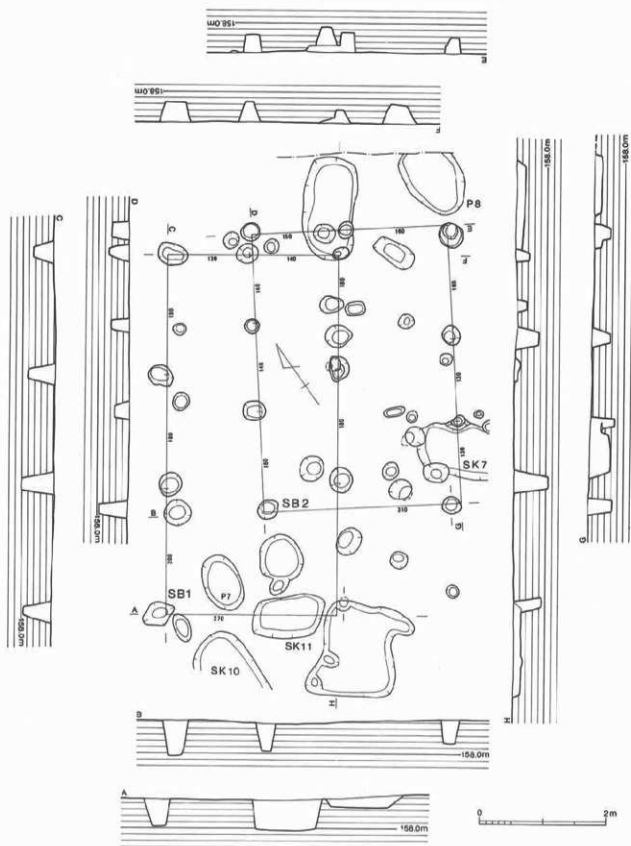


Fig. 7 SB1・2実測図 (1/60)

たが、掘り進めるうちに近世のものとわかって少し落胆したというのが本音であった。

石室掘り形は、北辺は直線的だが南辺はかなり丸くなり、東西300cm、南北230cmほどの平面偏円形である。南側が丸くなるのはこちらが入口にあたるからとしてよい。

石室は床面中央が最も低くなり、周壁の石材はそこより15cm前後高い所から積まれている。東西両小口部とも最下段に3個の石を置き、その上に東壁は3段、西壁は1段の石材が残る。北壁は5個の石を基礎に置き、その上に2～3段が積まれている。南壁は東半部に3個が基礎として据えられているが、西半部にはそれがない。これはこの部分が石室への入口にあたるからである。入り口部分は礫岩を置いて閉塞した状況である。石材は大半が緑簾片岩であり、安山岩、玄武岩もあった。床面プランは長方形で、幅は東側92cm、西側97cm、北壁長190cm、南壁は石材のある部分の長さが105cm、入り口部分の幅が75cmとなる。床面から検出面までの残存高は約50cmであったが、本来はもう少し高かったであろう。主軸方位はN-57.5°-W。出土遺物はこの遺跡の中で最も多く、陶磁器のほかには瓦質土器・鉄器・木炭があったが、ほとんどが廃棄後に投棄されたものとみなされる。陶器の中にはSK7・10・17、P5・9・16の出土品と接合したもの、もしくは同一個体のものがある (Fig. 19・87・88・95・96)。縄文土器片も1点あった。

出土遺物 (PL.10・11・12, Fig. 9-1~21, 20-1~10)

瓦質土器 (1・2) 1・2は火鉢であろう。別個体である。1は外面口縁下に12本の放射線を持った車輪文のスタンプがある。2の背面はナデが著しい。

陶器 (3~13) 3は土瓶の蓋と思われる。内面は露胎である。口径6.7cm。4は黄褐色の地肌に鉄絵が描かれる。磁器に近い。復原口径9.4cm。5は唐津系か。6は鉄釉の掛かった壺で、底径6.2cm。7は壺の胴部であるが、茶色地の上に下半は鉄釉を掛け、上半は白化粧土を塗ってのち凹線風にそれを掻き取り、その上に緑釉・褐釉が掛けられている。8は焼きしめ風の變で内面に指押さえ痕がある。9は

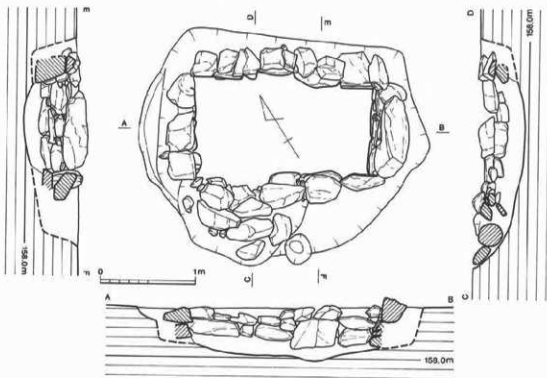


Fig. 8 1号石室実測図 (1/40)

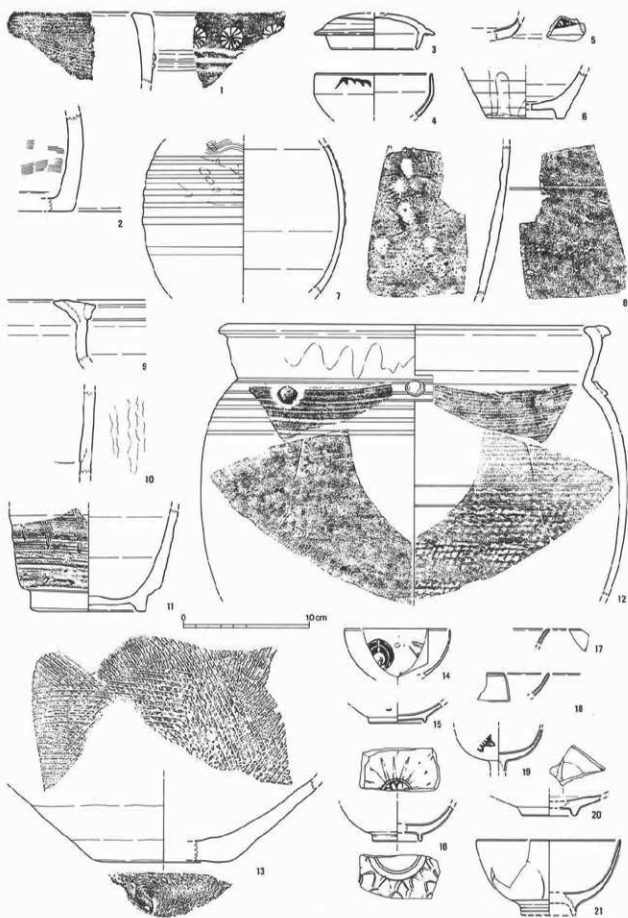


Fig. 9 1号石室出土遺物実測図 (1/3)

甕の口縁部片で、10はSK7出土の同一個体の胴部片である。11は壺で胴部には鉄漿を塗ったあとに横方向の掻き取りと縦刷毛が施される。底径9cm。12は外面に鉄軸を掛けた甕で、肩部には円形浮文が貼り付けられる。復原口径31.2cm。13は摺鉢で内面の摺目は一単位12本を数える。底径11cm。

磁器 (14-21) 14は色絵付けの碗で、破片の中では左に群青色に発色した呉須絵が、右に赤絵の鶴とおぼしき鳥が、その中間に色が充てているものの緑であったらしい花文があしらわれている。コンニャク判の施文らしい。復原口径8.6cm。15-21は染付碗である。15は復原底径4.6cm。16は外面に二重の網目文を施す。17は口縁が端反りになる。19は脚台が付くので仏飯器になろう。破片の断面に貼り合わせの線が見える。20は内面見込みが蛇ノ目状に釉剥ぎとなる。底径4.4cm。21は地肌はくすんだ白灰色を呈し、呉須は緑褐色に発色している。復原口径11.6cm。

鉄器 (Fig. 20-1~10) 10点の鍛造品の出土をみるが全てについて形状・用途ともによくわからないものである。1は刀子であろうか。柄に対して刃部が反っている。2・3は何の部品であるかわからない。4~9は鐙の茎かまたは釘の一部分のようにも見えるが、5・6のように端部に輪を作り出したと思われるものもあり不明とせざるを得ない。10も不明。

c. 土壌

近世のものは21基を取り上げるが、なかには土壌というより柱穴に近い大きさのものもある。いまは調査時の取り扱いに従っておく。以下の説明における計測値は上面でのものである。

SK 1 (PL. 4・6, Fig. 10)

調査区の東端部に近い所にある。南北に主軸を持つ隅円長方形プランで、長軸210cm、短軸150cmを測り、深さ45cmが残る。黒灰色土を埋土としていた。陶器・磁器と縄文土器片が出土しているが、陶器はSK13・17、P8出土品と接合しているので後述する (Fig. 19-86)。

SK 3 (PL. 4・6, Fig. 10)

SK 1の北方にある。不整円形プランで長軸145cm、短軸120cmを測り、深さ38cmが残っていた。陶器・磁器と砥石、阿蘇凝灰岩礫2個が出土している。

出土遺物 (PL. 10・11・14, Fig. 15-22~28, 26-7)

陶器 (22-27) 22は半磁器質の碗で、見込みに鉄絵が描かれる。高台を含めた底面部分は無釉である。復原口径10.2cm。23・24は鉄軸の掛かった甕で、24の内底面には網らしき圧痕があり、外底面には稲藁の圧痕がある。底径13cm。25-27は摺鉢で、3点ともに軸は掛からず鉄漿が塗られている。25・26は同一個体と思われるが、それらと27についてはわからない。25の摺目は一単位17本。27の内底面はよく摺りこまれている。復原底径12cm。

磁器 (28) 皿の底部である。群青色に発色した見込みの絵は山と木と四阿らしきものが描かれる。

石器 (Fig. 26-7) 粘板岩と思われる石材の砥石である。中砥であろう。現存長5.7cm。

SK 6 (PL. 4・6, Fig. 11)

SB2の南方にある。これの東側にP3~5等の南北に並んだピット群があり、これらと関係する

ものかもしれない。直径75～80cmの偏円形プランで、深さ35cmが残る。南側の浅い掘り込みも一連のものだろう。瓦質土器・内黒土器・陶器・磁器が出土しており、SK 8と接合したものもある (Fig. 19-93)。

出土遺物 (PL.10, Fig. 16-29～34)

瓦質土器 (29) 硬質の土師器に近い焼成で、火鉢であろうか。復原底径23.4cm。

陶器 (30・31) 30は内外に鉄釉の掛かった摺鉢で、焼きは硬い。31は磁器としてもよいもののだが陶器とする。黒く発色した横一棒の鉄絵がある。復原口径8.6cm。

磁器 (32～34) 32の見込みには重ね焼きの痕跡がある。高台内底部に銘款の一部が見える。復原底径3.6cm。33は焼成時の温度が高温になりすぎて器表が白濁し文様は不鮮明である。底部はきわめて小さい。復原で口径8.7cm、底径3.1cm、器高4.5cm。34は腰がL字形に折れる器形で外面に草花文をあしらう。復原口径8.4cm。

SK 7 (PL.4・6・7, Fig. 11)

SB 2と重複した細長い細長プランである。長軸288cm、短軸85cmを測り、深さ30cmが残る。陶器・磁器と黒曜石剥片が出土している。磁器の1点はP5出土品と同一個体である (Fig. 19-90・91)。

出土遺物 (PL.10, Fig. 16-35～37)

陶器 (35・36) 35は磁器に近い。黄褐色釉が掛かる。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎする。36は大型の壺で、外面は鉄漿を塗り、内面は鉄釉の上に黄緑灰色釉が掛かっている。高台畳付きには砂目痕があり、外底部にはへう記号が施されている。復原底径9cm。

磁器 (37) 色絵磁器である。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎするが、その部分には黒の外行連弧文を描き、次に釉剥ぎの線と重なることを意図して赤の同心円文を描く。その内側はもう一つの圈線を描いた内側にやはり赤の内行充填連弧文を描いている。体部には赤の花文を入れる。そしてその後で釉剥ぎの部分には緑釉を掛けているがこれは十分に発色していない。釉は艶消し状となるが、高台畳付きは無釉で、砂目痕があり、そこに緑釉が付着しているから同じものを重ね焼きしたことがわかる。復原底径4.2cm。

SK 8 (PL.4・6, Fig. 11)

SK 6のすぐ西にある。長軸108cm、短軸70cmの小さな楕円形プランで、深さ16cm。P9出土品と接合した2点の瓦質土器と、陶器が出土している (Fig. 19-84・93)。

出土遺物 (PL.10, Fig. 16)

陶器 (38) 胴部がくの字に屈折する壺である。内面は無釉で、外面は褐色釉が掛かる。

SK 9 (PL.4・6, Fig. 12)

1号石室の北西にある。不整な隅円長方形プランで長軸220cm、短軸133cmを測り、床面まで40cmの深さがあるが、その北側はさらに20cm深くなる。黒灰褐色土が入っていた。瓦質土器が出土したのみである。

出土遺物 (PL.10, Fig. 16-39)

瓦質土器 (39) 内外が黒褐色を呈する鉢で、復原口径15.6cm、底径13.2cm、器高4.9cm。

SK10 (PL.4・6, Fig.12)

SK 9の北にある。幾つかの土塊が連結したような不整形プランであるが調査時には切り合いはわからなかった。最大長400cm、最大幅235cm、深さ30cmを測る。陶器・磁器と黒曜石剥片が出土したが、ほかに石もたくさんあった。陶器のうち1点はP 7出土品と接合し、もう1点は1号石室出土品と同一個体である (Fig.19-85・87)。

出土遺物 (PL.10, Fig.16-40~47)

陶器 (40) 灰色の器胎に鉄絵が描かれた皿である。絵唐津であろう。

磁器 (41~47) 41は端反り口縁の白磁小片である。染付になるかどうかわからない。42は白灰色を呈する白磁猪口で、復原口径6.6cm。43・44は白磁碗で、43は復原口径10cm。44は外面に波と花の型押し施文がなされている。復原口径9cm。45は染付碗で群青色の呉須絵は海と山と雁飛翔の図柄である。復原口径9.8cm。46は染付の広皿で、内面体部の雲気文は墨弾き技法で描いているらしい。47は染付皿で口縁は輪花状になる。内面は見込み中央にコンニャク判の五弁花が入り、体部は草花文と唐草文を施す。外面は体部が唐草文で、高台内部に「年製」の文字が残る。呉須の発色は古式を思わせる。内外ともに無数の擦過痕があり、よく使用されていたことをうかがわせる。1/4ほどの残存で復原口径13.5cm、底径7.6cm、器高3.9cm。

SK11 (PL.4・6, Fig.12)

SB 1の南辺梁行と重複する。長軸106cm、短軸67cmを測る長方形プランで、深さ50cm。陶器・磁器があり、図示しうる磁器はP 5出土品と接合しているので後述する (Fig.19-92)。

SK12 (PL.4・6・7, Fig.10)

1号石室の東にあり、東西に長いプランで、東端部は別の細長い土塊を切っている。長軸は225cmで、短軸は80cmを測る。深さ30cm。西端部が広がっているのはこの北側にP 16があって重複していたからであるが、その先後関係はわからず、結果的に一連の土塊のようになってしまった。陶器・磁器が出土し、陶器の1点はSK17出土品と接合している (Fig.19-94)。

出土遺物 (PL.10, Fig.16-48・49)

陶器 (48) 皿で釉のなかに白濁した所がある。復原口径13.2cm。唐津焼か。

磁器 (49) 染付碗の口縁部小片で、かなりくすんだ製品である。

SK13 (PL.3・4, Fig.13)

1号石室・SK12の南方にある。円形プランに突出部が取り付いたような形状である。円形部の中央には浅いビットがある。長軸210cm、短軸140cmで、深さ35cm。黄茶褐色土が入っていた。出土した陶器はSK1・17、P 8と、磁器もP 8出土品と接合しているので後述する (Fig.19-86・89)。

SK14 (PL.3・4, Fig.13)

SK13の北西にある。不整形プランで長軸170cm、短軸130cm、深さ20cmを測る。黒茶褐色土を埋土とする。磁器と石器が出土したが磁器は図示できない。

出土遺物 (PL.14, Fig.26-8)

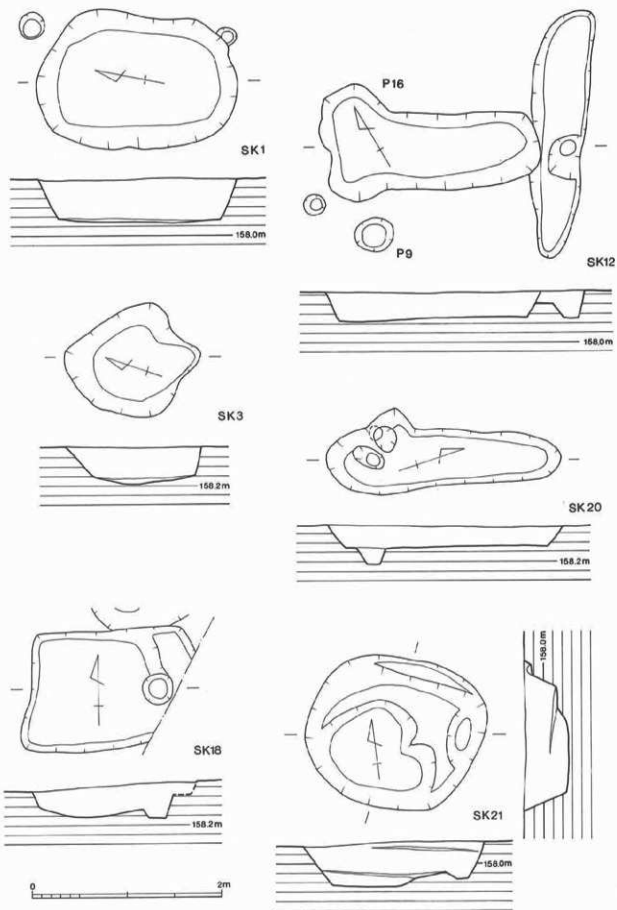


Fig.10 SK1・3・12・18・20・21実測図 (1/40)

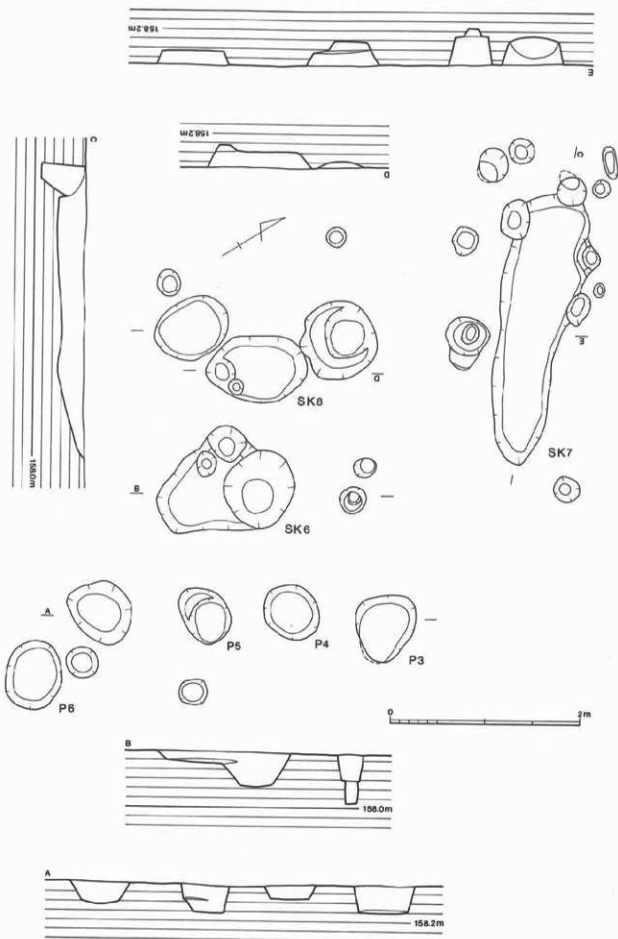


Fig.11 SK 6 ~ 8、P 3 ~ 6 実測図 (1/40)

台石 片岩の扁平な石器で台石としておくが、すり石とした方がよいかもしれない。両側面の敲打痕とともに表裏面にも使用痕がある。長さ10.5cm、幅5.5cm、厚さ1.5cm。

SK15 (PL.3, Fig. 13)

SK14の西にある。直径117~130cmの偏円形プランで、深さ25cmが残る。北側の浅い掘り込みも一

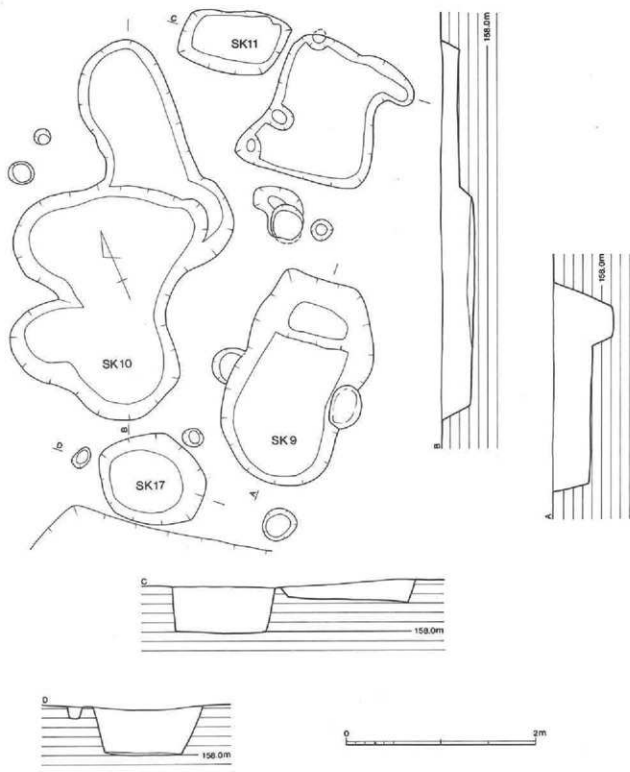


Fig. 12 SK 9 ~ 11・17実測図 (1/40)

連のものだろう。黒茶褐色土が埋土であった。土師器・瓦質土器・陶器・磁器が出土している。

出土遺物 (PL.10・12, Fig.16-50~53)

瓦質土器 (50) 火鉢であろうか。突帯の上部に波状文の一部が見える。

陶器 (51) 無頸壺で口唇部から内面の頸部、胴部には露胎の部分がある。軸は内面が黄茶色、外面は黄灰色をなし、肩部には褐色に発色した鉄絵が描かれる。復原口径10cm。

磁器 (52・53) ともに染付碗で、53の高台内面には「大日(明)年製」のかなり簡略化された文字がある。復原底径4.2cm。

SK16 (PL.3・4, Fig.13)

SK15の北にある。直径110~125cmの偏円形プランで、深さは15cmと浅い。黒茶褐色土が入っていた。磁器と安山岩の円盤が出土した。

出土遺物 (PL.10・14, Fig.16-54・55, 26-9)

磁器 (54・55) 54は青磁碗の体部片である。龍泉窯系の輸入陶磁と思われる。55は外面に二重網目文が描かれた染付碗の小片である。1号石室のそれと同一個体にはならない。

石器 (Fig.26-9) 安山岩と思われる扁平円礫の周縁を打ち欠いて刃部状の尖った部分を作り出すが、用途はわからない。長さ9.3cm、幅8.2cm、厚さ2.0cm。

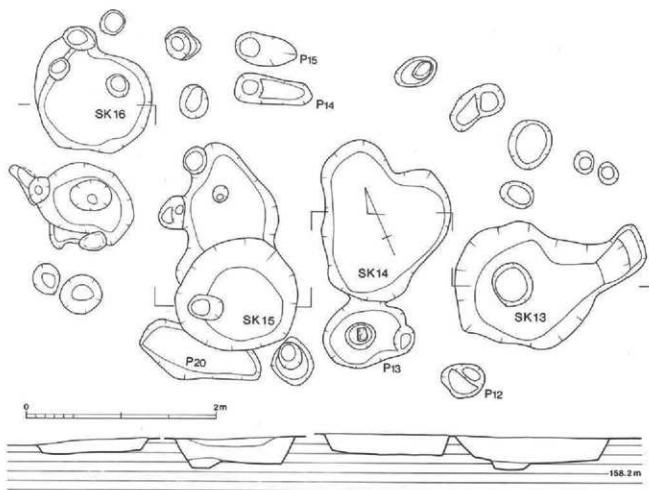


Fig.13 SK13~16実測図 (1/40)

SK17 (PL.3・4・6, Fig.12)

1号石室のすぐ北にあり、きわめて近接するが切り合いはない。直径96～116cmの偏円形プランで、深さは50cm。黄茶色土を埋土とする。陶器・磁器が出土し、陶器はSK1・13・P8、SK12、1号石室・P5と接合したものがある (Fig.19-86・94・95)。

出土遺物 (PL.10・11, Fig.16-56～58)

陶器 (56～58) 56は外面に鉄軸の掛かった甕の胴部片である。57は摺鉢の破片であるが、あとで1号石室・P5出土品 (Fig.19-95) と接合することがわかった。58も摺鉢で内面体部にうすく鉄軸が掛かるのみで他は無軸である。内面に径8cmほどの範囲で煤とおぼしき黒色物が付着する。外底面には糸切り痕の上に稲藁の圧痕がある。胎は赤茶色を呈する。底径13.8cm。

SK18 (PL.3・4・7, Fig.10)

SK1・2の南方にあってSK19を切り、一部は調査区外にかかっている。幅125cmで長さ180cmほどの長方形プランであろう。床面東側は一段高くなり、その段違いの所にビットがある。深さ30cmが残る。陶器・磁器が出土しているが、磁器は図示できない。

出土遺物 (PL.10, Fig.16-59)

陶器 (59) 鉢の破片で器壁がかなり薄い。摺鉢であろうが。

SK20 (PL.3・4・7, Fig.10)

SK18の西にある。南北に細長いプランで、長軸245cm、短軸70cm、深さ25cmを測る。床面と壁面に小ビットがある。陶器・磁器が出土しているが、磁器は図示できない。

出土遺物 (PL.10, Fig.16-60)

陶器 (60) 磁器に近い碗であり、外面の体部下半と底部は無軸で、その他は内面とも灰軸が掛かっている。復原で底径4.4cm。

SK21 (PL.3, Fig.10)

調査区の西北端部に近い所にある。直径158～193cmの偏円形プランで、北側は段が付き、東端にはビットがある。深さは45cm。黄茶褐色砂質土を埋土としていた。図示できないけれども瓦質土器が出土しているので近世のものとしたが、他には弥生土器片3点・縄文土器片7点と黒曜石の使用剥片が出土している。縄文土器は後述する。

SK25 (PL.3, Fig.14)

SK21の北方にあって不整形をなす。南北最大長150cm、東西最大長185cm、深さ30cmを測るが、もとは四角形に近いプランであったろう。瓦質土器・陶器・磁器が出土しているが、図示できるのは陶器片だけである。サヌカイト製の鉢も出土したがこれは後述する。

出土遺物 (PL.10, Fig.17-61・62)

陶器 (61) 碗の高台部分で、無軸であるが裾部は鉄漿が塗られている。復原径9.6cm。

磁器 (62) 外面に二重の網目文を施した染付碗の小片である。SK16のそれと同じ軀体にはならないようだ。

SK26 (PL.3, Fig.14)

調査区の西端部にある。幅115cm、長さ130cmの長方形プランで、深さ20cm。陶器と縄文土器片2点が出土した。

出土遺物 (PL.10, Fig.17-63)

陶器 (63) 黒釉の掛かった碗で、高台皿付きは露胎に砂が付着する。内面には一部に灰釉が掛かる。復原底径4.2cm。

SK28 (PL.3, Fig.14)

SK26の南方にあり、長軸190cm、短軸90cmの細長いプランをなす。深さ30cm。西壁沿いに石がある。瓦質土器と砥石、黒曜石製の鎌が出土している。鎌は後述する。

出土遺物 (PL.10・14, Fig.17-64, 26-10)

瓦質土器 (64) 軟質の須恵器に近い焼成である。壺になろうか。

石器 (Fig.26-10) 砥石とするが台石とすべきかもしれない。表面のみがよく擦れている。片岩であるため剥落が著しい。長さ10.6cm、幅10cm、厚さ1.9cm。

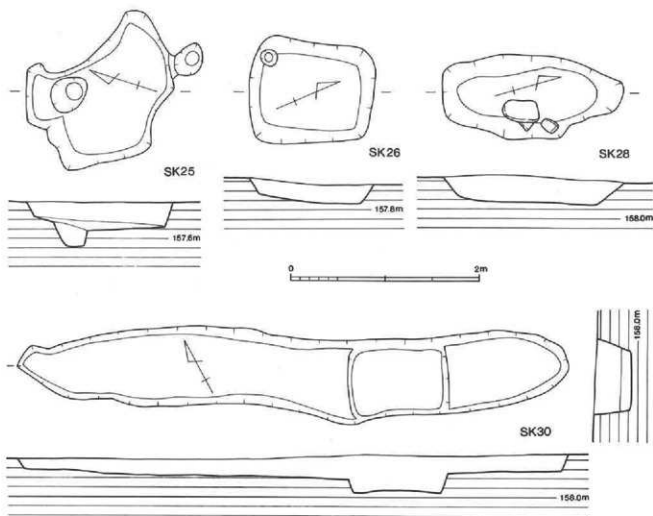


Fig.14 SK25・26・28・30実測図 (1/40)

SK30 (PL.3, Fig.14)

1号石室・SK16の西にある。長軸580cm、短軸90cmの細長い溝状のプランをなす。深さは25cm前後であるが、床面の中央より東寄りの所がさらに20cmほど深くなる。磁器が出土している。

出土遺物 (PL.10, Fig.17-65・66)

磁器 (65・66) 65は染付碗の小片で、見込みにも呉須の文様があるが不鮮明である。高台は畳付きが内側へ切りあがって露胎となる。66は白磁碗で高台畳付きのみ露胎である。

d. その他

ビット (PL.3・4, Fig.6)

建物としては捉えられないビットで遺物の出土したものがある。以下に取り上げるのは接合資料の出土したものをも含めて10個である。P8と13には竈壁片が出土している (PL.14)。

P1はSK3の西、P2はP1の西南、P11・12・13はSK13・14の南にある。

P5・7・8・9・16は接合資料が出土している。P5はSK6の東にあり (Fig.11)、P7はSK11の北、P8はSB2の北東、P9はSK12の南、P16はSK12と重複してその北にある。

出土遺物 (PL.11・12, Fig.18-67~80)

67は陶器碗で外面黄灰色の上に紅色と緑色の絵付けがある。P1の出土。

68・69はP2の出土。68は白磁の小碗で、復原口径7.8cm。器壁が薄い。69は外面が青磁で、内面と高台内部が染付の碗である。見込みに五弁花、口縁直下に四重X字の連続文をあしらう。高台畳付きのみが露胎となる。釉は厚い。口径11.4cm、底径4.4cm、器高6.9cm。

70はP7出土の瓦質土器である。鉢になろうか。

71はP8出土の染付碗。文様の詳細はわからない。

72・73はP11の出土。ともに陶器で、72は壺、73は摺鉢である。72の外面上半が緑釉、下半と内

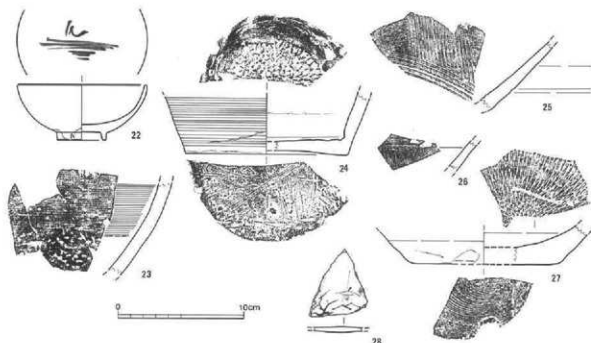


Fig.15 SK30出土遺物実測図 (1/3)

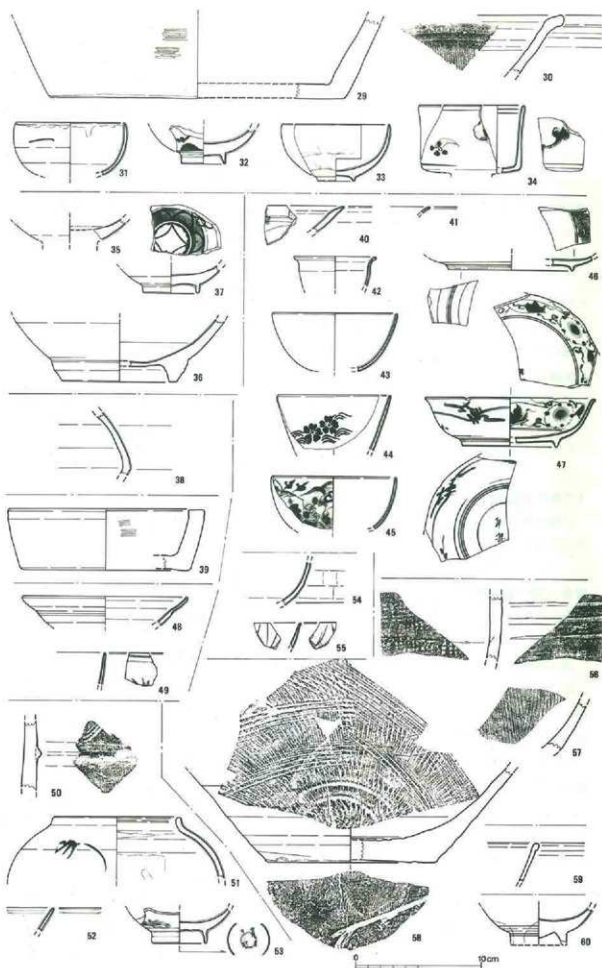


Fig.16 SK 6~10・12・15~18・20出土遺物実測図 (1/3)

面は鉄軸が掛かる。73は口縁周辺に鉄軸が掛かる。

74はP12出土の陶器摺鉢で、内面は鉄軸が掛かり、また砂目がある。外面は高台部分を除いて鉄漿を塗る。高台には切り込みがある。復原底径13.2cm。

75は瓦質の摺鉢で、P13の出土。摺鉢は一単位4本である。

76~80はP16の出土。76は瓦質の鉢である。77・78は陶器の摺鉢であり、ともに口縁部周辺のみ鉄軸が掛けられる。78は瓦質としたほうがよいのかもしれない。78の復原口径34cm。79は龍泉窯系の輸入青磁碗であるが、見込みの陰刻は何を表現したものかわからない。80は染付皿で外面の唐草文は熱で呉須のはじけた所がある。

Fig.21-11はP9出土の鉄器で、鋤先であろうか。

SX1 (PL.11, Fig.6)

調査区の北西部に段落ちがあったが、ここからも若干の遺物が出土している。SX1の北側はすぐに矢部川への崖となるので、この段落ちの線は矢部川が浸食した南端の部分にあたるのだろう。

出土遺物 (PL.11, Fig.18-81・82, 20-12)

81は龍泉窯系の青磁小皿片である。復原口径9cm。82は染付碗で外面に草花文をあしらう。復原口径11.4cm、底径5.8cm、器高4.3cm。

Fig.20-12は鉄刀子の破片である。

その他出土遺物 (PL.11, Fig.18-83)

試掘の時に出土していた弥生土器である。後期の甕の口縁部片で内外とも刷毛目が著しい。終末期であろう。

接合・同一個体資料 (PL.11-12, Fig.19-84~96)

84は瓦質土器で摺鉢かこね鉢になろう。煤が付着している。復原口径17cm。SK8とP9出土品が接合した。

85は陶器皿で体部の上半が屈折して口縁はやや内湾する。見込みを蛇ノ目状に軸刺ぎし、そこには砂目が残る。幅の広い高台と体部の一部までが露胎である。外面の高台直上の体部にも砂目が付着する。黄灰色を呈するが内面の一部に緑灰色釉が掛かる。口径12.6cm、底径4.5cm、器高3.7cm。SK10とP7出土品の接合である。

86は陶器の甕で、体部上半は黒釉、下半は鉄釉が掛かり、内面は露胎である。胴口径15.2cm。SK1・13・17・P8出土品が接合している。

87は焼締め陶器の甕であり、胎は灰色をなし、地肌は赤茶色を呈する。外面は格子目タタキの上をナデ、内面は同心円に格子目を刻んだ当具痕がある。内外とも灰被りとなって特に外面は黄釉が軸垂れ状となる。復原胴径

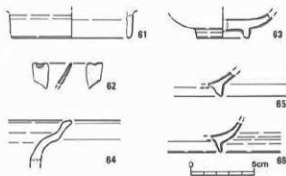


Fig.17 SK25・26・28・30出土遺物実測図 (1/3)

27cm。1号石室とSK10出土品が同一個体である。

88は内外に黒釉ともいえる鉄釉の掛かった壺である。口縁はL字形に折れ、口唇部は幅広くなり、ほぼ直立した頸部下の肩部は張りを持ってそこに最大径がある。胎は紫褐色をなす。復原口径26.3cm、肩径27cm。1号石室とP16出土品が同一個体である。

89は染付の皿で、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎする。呉須はくすんだ灰青色に発色している。復原口径12.5cm。SK13とP8出土品が接合した。

90・91は染付碗で、外面にのみ文様がある。草花文らしいがはっきりしない。高台畳付きは露胎である。高台内に銘款の一部が見えるものの何であるかわからない。復原口径9.6cm、底径4.4cm、器高5.6cm。90はSK7、91はP5出土品で同一個体と思われる。

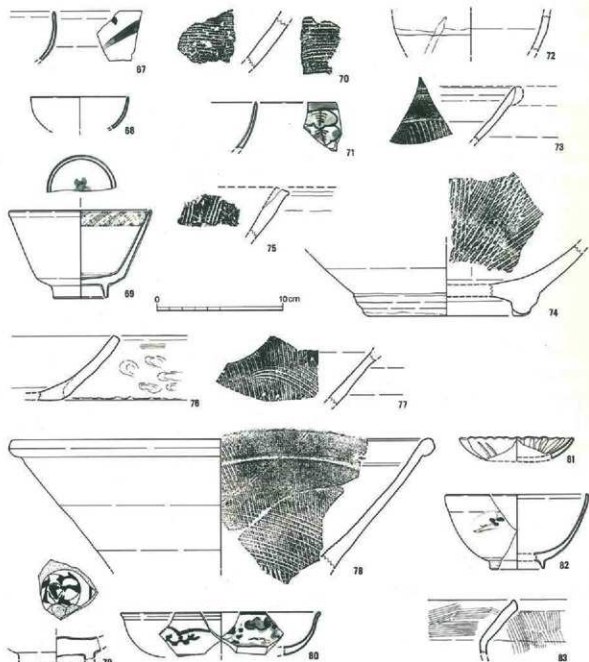


Fig. 18 ビット等出土遺物実測図 (1/3)

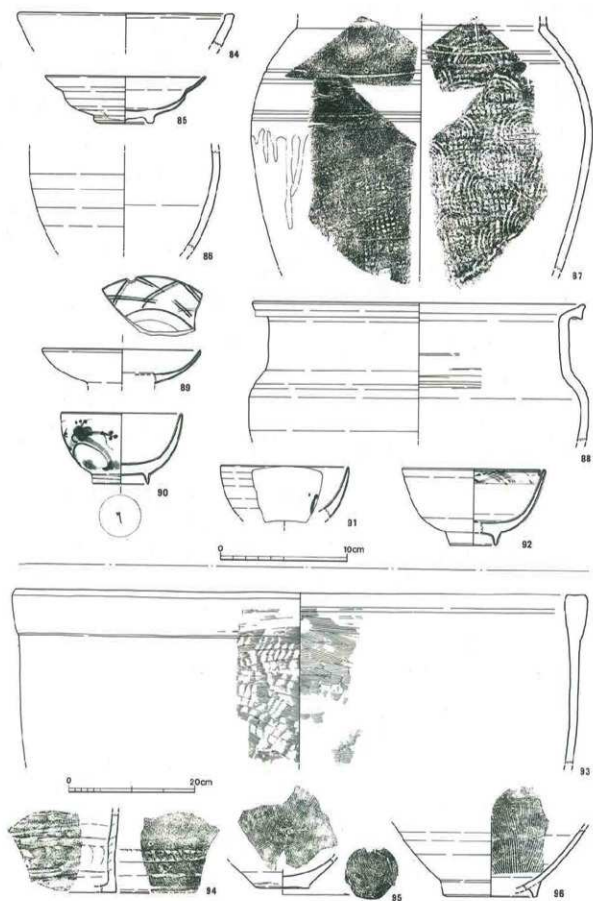


Fig.19 接合資料実測図 (1/3・1/6)

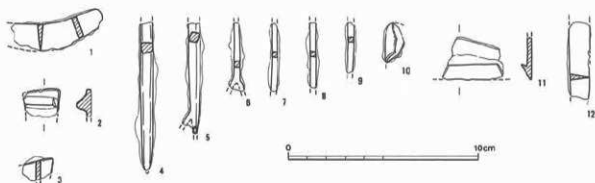


Fig. 20 城ノ原遺跡出土鉄器実測図 (1/2)

92も染付碗で、これは内面の口縁直下に文様と底面に圏線がある。外面はかなりの釉ムラがある。高台皿付きは露胎。復原口径11.4cm、底径3.8cm、器高6.0cm。SK11とP5出土品の接合。

93は大型の瓦質土器である。直口の甕形をなし、口縁部は肥厚する。内外ともに刷毛目調整で、外面はその上をナデている。復原口径92.2cm。SK6とSK8の出土品が接合した。

94は焼締めの陶器で甕であろう。内外ともに黄色の自然釉がふりかかっている。内面には粘土紐巻き上げの継ぎ目がよく見える。SK12とSK17の出土品が接合した。

95・96は焼締めの陶器摺鉢である。95は糸切りの平底で、内底面はよく使い込んでいて滑らかである。底径8.7cm。1号石室とSK17・P5の出土品が接合した。96は高台の付く器形で、摺目は一単位13本を数える。復原底径15cm。1号石室とP9出土品が接合している。

2. 縄文時代の遺構と遺物

a. 土壌

SK 2 (PL. 3・4・6, Fig. 21)

SK 1の北にある。東西に細長いプランで、長軸202cm、最大幅93cm、深さ55cmを測る。台石が出土している。

出土遺物 (PL. 14, Fig. 26-6)

台石 凝灰岩質の扁平石の表面は擦過痕は見えないが、滑らかであってよく使われていることがわかる。長さ12.2cm、幅11.6cm、厚さ3.4cm。

SK 4 (PL. 3・4・6, Fig. 21)

SK 2の北西にあり、底辺170cm、高さ230cmの二等辺三角形に近いプランで、深さ40cmを測る。縄文土器片のほかには礫石が多かった。

出土遺物 (PL. 13, Fig. 24-102)

土器 晩期の鉢の破片である。

SK 5 (PL. 3・4, Fig. 21)

SK 4の南西にある。不整形プランで、東西長195cm、南北長165cmを測る。床面の凹凸が著しいが深さは最深40cmである。台石2点が出土している。

出土遺物 (PL.13, Fig.25・4・5)

台石 (4・5) ともに玄武岩質の石材で、4は表面の中央が少し窪んでいる。長さ18.8cm、幅12.5cm、厚さ7.5cm。5は4よりも扁平で、表面はよく擦れている。長さ21.5cm、幅16.4cm、厚さ6.6cm。

SK19 (PL.3・4・7, Fig.21)

SK18に切られてその北にある。長軸148cmで、短軸は85cmほどであったろう。床面は中央が最も深くなる二段掘りで深さ62cmである。土器片が出土している。

出土遺物 (PL.13, Fig.24・103~106)

土器 (103~106) 4点ともに同一個体の破片である。103に示すように鉢形になる。外面は条痕の凹凸が著しく粗々しいが所々にはミガキが施されている。また煤が付着している。内面は横ミガキである。復原口径37.8cm。

SK22 (PL.3, Fig.21)

調査区の西北端部に近い所でSK21の西南にある。直径73~100cmの偏円形プランで規模は小さい。深さ35cm。土器片が出土した。

出土遺物 (PL.13, Fig.24・114~119)

土器 (114~119) 全て晩期土器片である。114は半精製の浅鉢で本来は黒色磨研土器なのであろう。他は粗製の深鉢片である。

SK23 (PL.3, Fig.21)

SK22の北西にある。長軸130cm、短軸105cmの不整形プランで、深さ23cm。北側と東側に浅いビットがある。出土遺物はない。

SK24 (PL.3, Fig.21)

SK23の東にある。長軸162cm、短軸90cmの偏楕円形プランで、深さは18cmと浅いが、西側に二段に掘られたビットがある。黒曜石の剥片が出土したのみである。

SK27 (PL.3, Fig.22)

SK26の東にあり、長軸167cm、短軸77cmの細長いプランで、深さは12cmと浅い。東端部にビットがある。出土遺物はない。

SK29 (PL.3, Fig.22)

1号石室の西方、SK30の北西にあり、長軸558cm、短軸130cmの細長い溝状のプランをなす。深さは38cmでSK30よりはやや深い。土器片1点が出土したのみである。

出土遺物 (PL.13, Fig.24・122)

土器 (122) 外面は条痕らしき文様の上に煤が付着している。内面は条痕である。晩期であらう。

SK31 (PL.3, Fig. 22)

SK28の東隣にある。南北に長い偏楕円形プランで、長軸205cm、短軸125cm、深さ20cmを測る。床面東寄りにはピットがある。黒曜石剥片が出土したのみである。

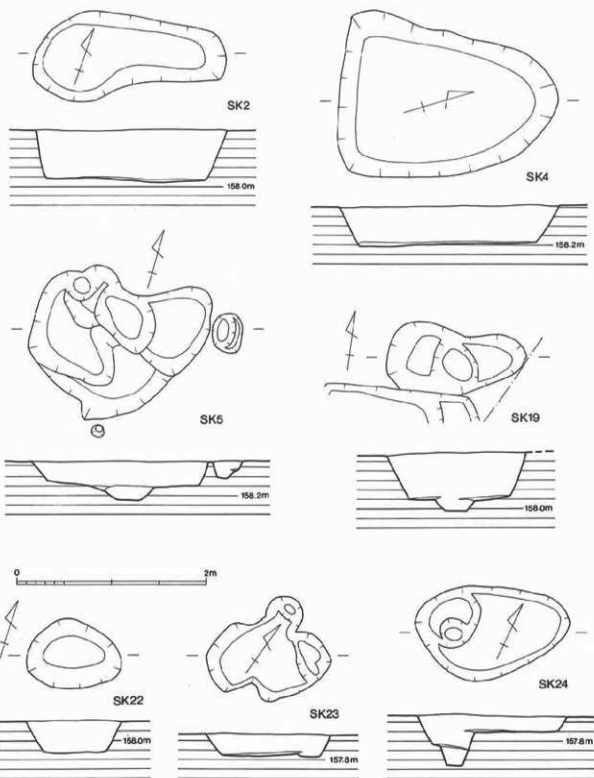


Fig. 21 縄文時代SK2・4・5・19・22~24実測図 (1/40)

b. その他

縄文時代の遺構・遺物が確認されたことに加え、遺構検出面に黒曜石剥片が見られたこともあったので調査区内にトレンチを設定したところ土器等が出土した。また、近世の遺構の中から縄文期の遺物が出土しているものがある。

トレンチ (PL.3・4, Fig.6・23)

調査区北半の西寄り、SB 1 とSK21の間で柱穴の少ない所に、幅240cm、長さ400cmの第1トレンチを設定し、その北半を幅90cm、長さ450cmで東側に延長して第2トレンチとした。さらに第1・2トレンチと平行して北側に幅120cm、長さ620cmの第3トレンチを設け、これらの西端部を取り込んで直交するように北側に延長し、幅120cm、総長800cmになる第4トレンチを設定した。1トレからは土器片と黒曜石・サヌカイトの剥片が出土したが、土器は東端部に多かった。3トレは上面から瓦質土器・陶器片が、下層から黒曜石剥片が出土した。

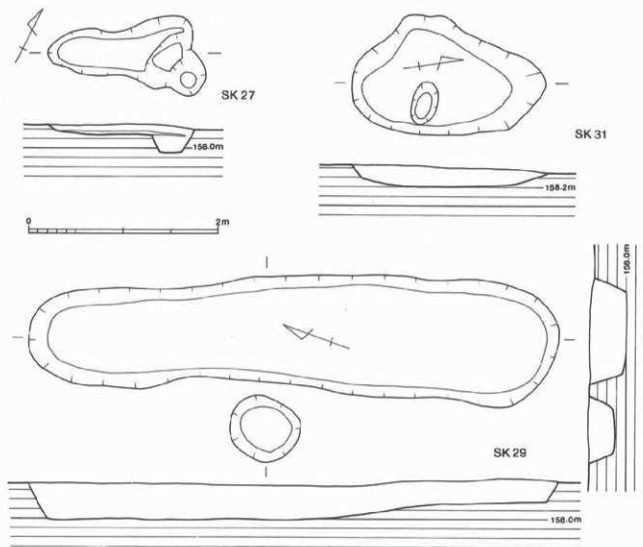


Fig.22 縄文時代SK 27・29・31発掘図 (1/40)

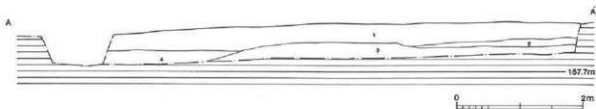


Fig. 23 綾ノ原遺跡 I 区 1・2 トレンチ土層図 (1/60)

出土遺物 (PL. 13, Fig. 24-123・124)

土器 (123・124) 123は口縁部片と胴部片を用いて図上で復原したが、他に同じ個体の小片が30片ほどある。口唇部には小さな刻みもしくは押圧文がある。体部は内外とも斜め方向の条痕である。内面にはコゲが付着する。器壁は薄い。復原口径36.2cm。前期か。124は外面にこぶ状の高まりがあり、その下には押点文がある。底部付近の破片の可能性もある。後期か。

ビット

P10とP21からは石器のみが出土しており、縄文期のものとみてよいだろう。P10は1号石室の東南、SK12とSK13の間にある。P21はSK22の西にある。

P10出土石器 (Fig. 26-11) くぼみ石である。長さ10.7cm、幅9.3cm、厚さ4.7cm。

P21出土石器 (Fig. 26-12・13) 12は打欠きと紐を掛けた痕跡が見られるので、形状が不定形であるけれども鏃として用いたものだろう。蛇紋岩に近い石材を用いている。長さ7.7cm、幅5.0cm、厚さ2.2cm、重さ104.3g。13はくぼみ石で、窪みは片面のみに見られる。側面に敲打痕や擦ったあとがみられる。長さ9.1cm、幅7.7cm、厚さ5.3cm。

その他出土遺物 (PL. 13・14, Fig. 24・25)

1号石室出土土器 (Fig. 24-125) 器壁の厚さ1.5cmにもなる分厚い破片で、外面には燃糸文が施される。前期であろう。下層からの出土である。

SK1出土土器 (Fig. 24-101) 晩期の粗製土器片である。

SK21出土土器 (Fig. 24-107・113) 7点とも晩期の粗製土器片で、112と113が同一個体の可能性がある。あるいは別個体である。

SK26出土土器 (Fig. 24-120・121) とともに晩期の土器片である。120は半精製の浅鉢で、121は深鉢の胴部片である。

SK25出土石器 (Fig. 25-1) サマカイト製の剥片鏃である。長さ2.1cm、幅1.3cm、重さ0.45g。

SK28出土石器 (Fig. 25-2) 黒曜石製鏃の脚の部分である。現存長1.9cm、重さ0.6g。

試掘調査時出土土器 (Fig. 24-126・127) 126の外面は山形文らしき文様が見えるが、判然としなない。内面には煤が付着している。127は晩期の鉢片である。

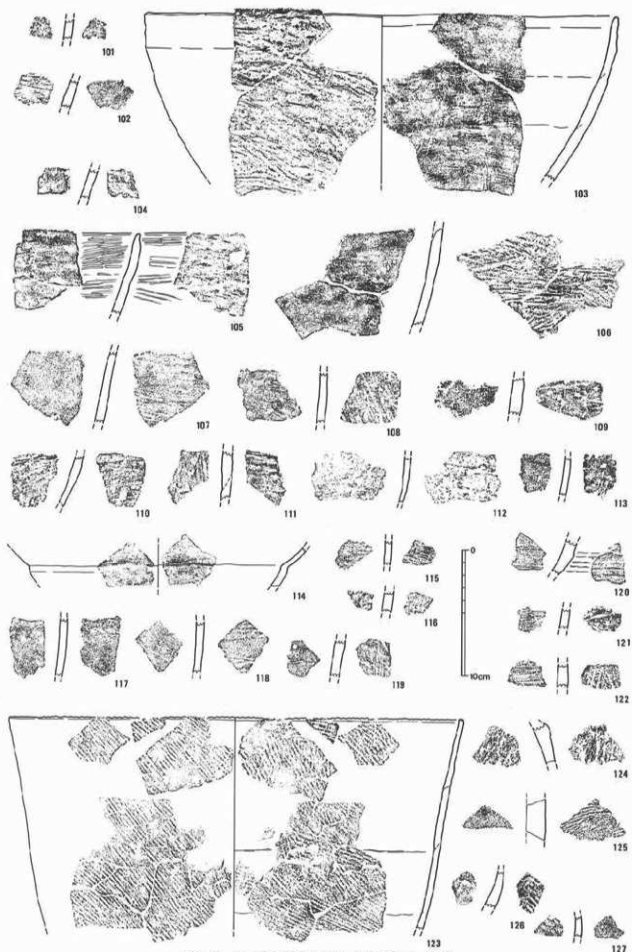


Fig. 24 城ノ原遺跡出土縄文土器実測図 1 (1/3)

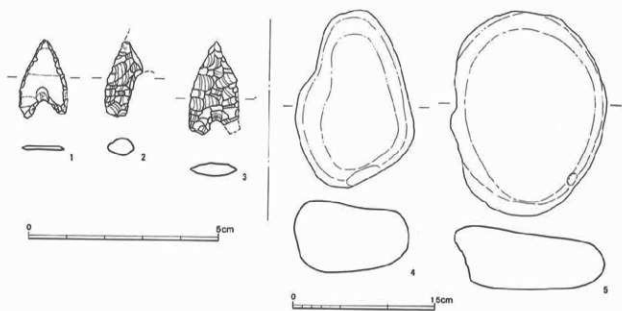


Fig. 25 城ノ原遺跡出土石器実測図1 (1/1, 1/4)

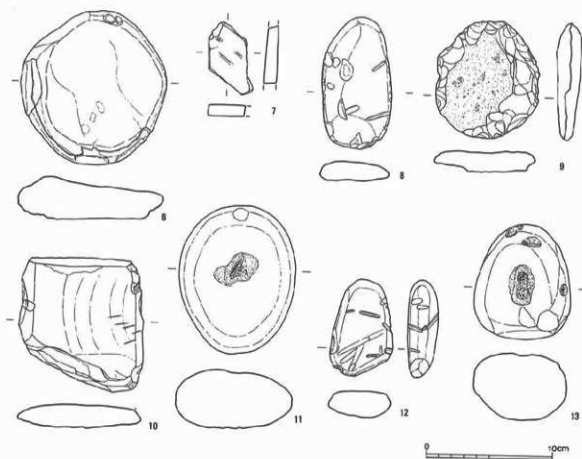


Fig. 26 城ノ原遺跡出土石器実測図2 (1/3)



Fig. 27 城ノ原遺跡Ⅱ区遺構配置図 (1/300)

B.Ⅱ区の調査

遺構はきわめて少なかった。調査区の西南端部に近くSK32があり、その北方と東側一帯に柱穴群が見られたのみである。柱穴群は建物としてまとまるものはない。SK32の東側には全く遺構がなかったのはおそらく削平されてしまった結果だろう。調査区北側の柱穴があるあたりは砂利を含む面が現れていたが、その南側は粘土質の面と砂質の面が見られた。調査区内の2カ所にトレンチを設定して土層を見たが、いずれにも溝状になろうかという線が捉えられたものの面的には確認できない (Fig. 28)。

a. 土壌

SK32 (PL.9, Fig. 29)

少し出入りがあるものの隅円長方形プランとしてよい。長軸288cm、短軸188cm、深さ42cmを測る。磁器と木炭片、縄文土器片、黒曜石剥片が出土している。

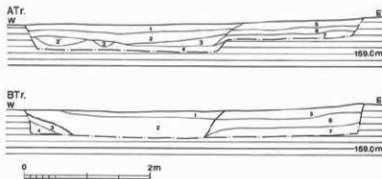
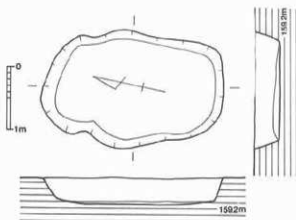


Fig. 28 城ノ原遺跡Ⅱ区A・Bトレンチ土層図 (1/60)

出土遺物(PL.11・13, Fig. 30-97, 31-128~131)

磁器(97)染付の碗か壺になる。釉調は淡い青白磁のそれに近い。

縄文土器(128~130)128と129は同一個体で、130ともに晩期の所産である。



b. 溝

SD 1 (PL.9, Fig. 27)

調査区の西端にある。この調査区境をもつて西側は一段低くなるので地境いかとも思ったが、出土遺物からすると近時のものではない。南端部は幅30cmほどしかなく、北にいくと西壁はなくなっている。さらに北側は別の溝が北にのびている。条里に関わるものの可能性もある。黒色土器、陶器、磁器、銅滓(PL.14)、木炭片、黒曜石製鏃が出土している。

出土遺物(PL.11・13, Fig. 30-98・99, 25-3)

黒色土器(98)内外とも黒色をなす碗の口縁部小片である。

磁器(99)龍泉窯系の青磁碗の口縁部小片である。

打製石鏃(Fig. 25-3)黒曜石製である。長さ2.4cm、幅1.3cm、重さ0.85g。

Fig. 29 SK32実測図 (1/40)

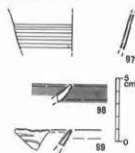


Fig. 30 II区出土遺物実測図 (1/3)

その他出土土器(PL.13, Fig. 31-128~131)採集の縄文土器片である。器表の風化が著しいが、外面には二列の列点文とその下に押引文がある。前期か。



Fig. 31 城ノ原遺跡出土縄文土器実測図 2 (1/3)

IV. おわりに

1. 近世の城ノ原遺跡

遺構

I区においては近世期の遺構は掘立柱建物跡2棟と石室1基、土塙21基、ピット群であった。それらはおもに調査区の東半部に集中して分布している。

掘立柱建物跡2棟はともに梁行の柱穴がはっきりせず、建物としての不安材料もあるが、桁行の主軸方位がSB1・2ともほぼ同一なのであるいは1棟の建物の柱配置を2棟と捉えている可能性もある。SK6・8周辺のP3～5等も柱穴の一部とすれば、ここは物置か、または厩に架けられた小屋のようなものであったと思われる。

石室は1基しかなかったが、地下に石組の部屋を作っていることより、貯蔵用穴蔵としての機能が考えられる。廃棄後に塵芥捨て場として利用されたものだろう。この手の石室は福岡市の博多遺跡群でも多くの検出例があり、便所・排水用の溜め枥・洗い枥などの用途が推定されている(福岡市教委1992)。また北九州市京町遺跡では地下室もしくは地下倉であろうと推定されている(北九州市教育文化事業団1994)。ここでは後者と同じ地下倉であったとの解釈に立っておくが、いずれにしても近世期の遺跡に類例が多々見られるものであり、それが黒木町のこの地に検出されたことに大きな意義を見だしておこう。

土塙は21基を取り上げているが、ほかにも出土遺物がないもので近世期の所産もあることだろう。これらは塵芥捨て場として掘られたものが大半と思われる。

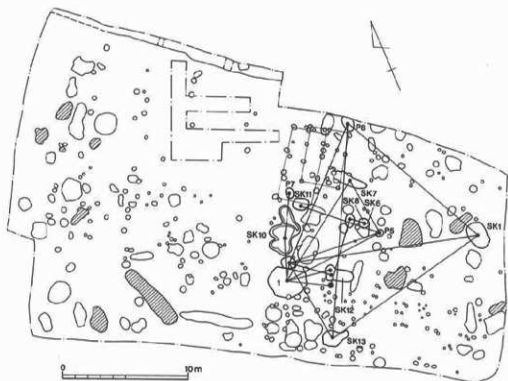


Fig.32 城ノ原遺跡近世・縄文の遺構 (1/300)

以上の遺構とピットのいくつかにおいて、出土遺物の中で接合したものまたは同一個体と見られるものがある。それぞれの関係を遺構ごとに結びつけていくとFig. 32のようになり、それは1号石室やSK17を中心としてSK1・6・7・8・10・11・12・13とP5・7・8・9・16が全て繋がってしまうことになる。少なくともこれらの遺構は時間的にあまり隔たりのない頃の所産と捉えてよいことになりそう。土壌はあまりに近接して存するものもあるので、若干の時期差があるのは確かである。しかし重複関係が極端に甚だしいものでもないで、それもあまり大きなものではないと考える。建物とその周辺に貯蔵用穴蔵やゴミ穴が存するという屋敷地の姿が彷彿とされる。

この地に屋敷があったなどということを記した古文書等の存在については寡聞にして知らないの
で、今のところは出土した遺物をもとに年代を推定するしかない。

Ⅱ区は遺構らしいものはSK32のみといってよい。これもⅠ区の遺構群と大差ない時期と捉えられる。なお、SD1については黒色土器・青磁からして12世紀頃の所産と思われる。この溝はもとの田の畦畔に沿って掘られており、かつ周辺の田圃の畦畔の方向もほぼ南北を示しているの、あるいは条里に関連するのかもしれない。

遺物の年代

Ⅰ区の出土遺物には瓦質土器・陶器・磁器のほか鉄器、砥石などがある。図示した個体は瓦質土器11個、陶器・磁器はともに40個ずつであった。陶器は摺鉢が12個体、磁器は碗が29個体で最も多い。土師器の小皿・坏が全く見られないことは何を意味しているのだろうか。

出土した陶磁器を大橋康二氏がなされている編年（大橋1984・89）に照らし合わせてみよう。

二重網目文碗は1号石室（Fig. 9-16）、SK16（Fig. 16-55）・SK25（Fig. 17-62）から出土しているが、網目文が二重になるのは18世紀が主体であるという。

色絵（赤絵）は17世紀中頃以降に盛行するもので、SK7（Fig. 16-37）、P1（Fig. 18-67）から出土している。

口縁が端反りになる碗は1650～1690年代に多いというが、SK10に小片がある（Fig. 16-41）。

外面が青磁釉で内面を染付としたものは1630～50年代に一般的であるという。P2から出土している（Fig. 18-69）。

内面の見込みを蛇ノ目状に軸割し、体部に複線交差文を施す染付皿は1700～80年代とされており、SK13、P8から出土している（Fig. 19-89）。

コンニャク判は18世紀前半に流行した装飾法といわれるが（大橋1984・85・89）、1号石室出土の碗（Fig. 9-14）はそのコンニャク判による施文と思われる。

いくつかの遺物についておよそ以上のような年代を推定できることになり、古くは17世紀中頃からの遺物が存する。新しくは18世紀後半までの幅で捉えられるが、先にあまり時期差を考えないとした推論からしても、18世紀前半の頃にはこの屋敷地が廃絶されたものと考えたい。

陶磁器の産地

Ⅱ章において紹介したように、黒木町には4カ所に近世の窯跡がある。操業開始の時期については各窯とも明確ではないが、そのうち釈形焼は17世紀に遡ると思われるものの、今村焼・鹿子生焼はおそらく19世紀に下るものであろう。池の本焼はよくわからない。磁器を焼成したことがわかっているのは鹿子生焼のみである。

筑後地方には他に男ノ子焼・朝妻焼・朝田焼などの磁器を焼いた窯跡、星野焼・本星野焼・野町

焼・水田焼・蒲地焼・二川焼・黒崎焼・赤坂焼・坂東寺焼・十三部焼・東野亭焼・柳原焼等の陶器を焼いた窯跡が知られている(浅野1935)。それらの実態が全てつまびらかになっているわけではないので軽々しく判断することはできないが、年代的に見てもこの城ノ原遺跡で出土した陶磁器類はほとんどが肥前の唐津・有田で生産されたものと思われる。幕藩体制下でのその流通の背景についてはまだまだ不明な点が多い。

2. 縄文時代の城ノ原遺跡

I区で土壇10基を縄文時代のものとした(Fig. 32の斜線のもの)が、遺物の出土していないものについては確証はない。土壇とするもののその性格は不明である。土器が出土したのは7基で、SK19・21・22に破片が多かった。それらは全て晩期であり、図示した22点のうち浅鉢はSK22の1点のみで他は鉢または深鉢である。条痕による調整が大半であって晩期前半期に属するものであろう。

I区1トレンチ出土の条痕文土器(Fig. 24-123)は前期であろう。1号石室の燃糸文土器(同125)、II区採集の列点文を有する土器(Fig. 31-131)も前期に属するものと考えられる。この時期の遺構は何ら見られなかったもののI区出土品は磨滅した様子もないので、住居跡等が近在する可能性がある。

浅野陽吉 1935 『筑後陶器考』

大橋康二 1984 『肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—』

『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館

1985 『肥前磁器の流れ』 季刊考古学 13号

1989 『肥前陶磁』 考古学ライブラリー 55 ニュー・サイエンス社

北九州市教育文化事業団 1994 『京町遺跡4—永照寺跡地(II-3区)の調査—』

北九州市埋蔵文化財調査報告書 第148集

九州陶磁文化館 1992 『福岡の陶磁展』

黒木町史編さん実務委員会 1993 『黒木町史』

黒木町教育委員会 1991 『猫尾城跡』 黒木町文化財調査報告 第1集

福岡県教育委員会 1980 『福岡県遺跡等分布地図(八女市・八女郡編)』

福岡市教育委員会 1992 『博多30—博多遺跡群第60次発掘調査報告書—』

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第285集

PLATE



1. 城ノ原遺跡遠景（北西から）



2. 城ノ原遺跡と大淵小学校（北西から）



1. 城ノ原遺跡遠景（南東から）



2. 城ノ原遺跡気球写真（西から）



城ノ原遺跡Ⅰ区全景



1. I区東半
気球写真



2. I区
SB1・2等

1



2



3



1号石室（1：南から、2：西から、3：北から）



1.
SK 1 ~ 4
(南から)



2.
SK 4 ~ 17
(西から)



3.
SK 9 ~ 17
(南から)

1.
SK 7
(南から)



2.
SK12
(北から)



3.
SK18~20
(西から)





1



3



5

1～4. I区北斜面近世墓（北から） 5. I区 1・2トレンチ（南西から）



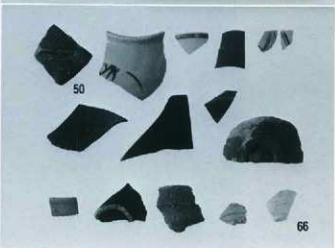
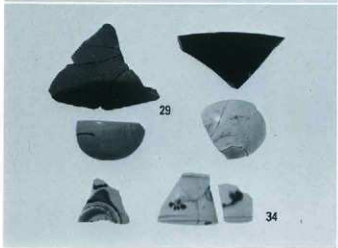
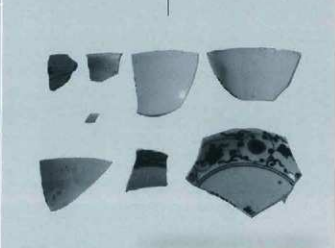
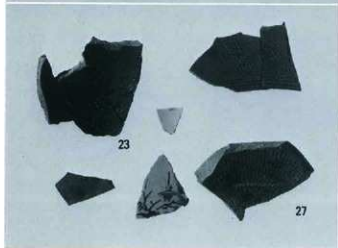
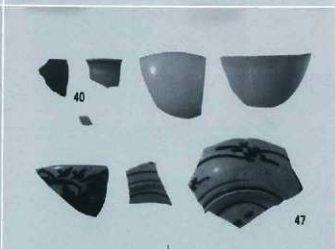
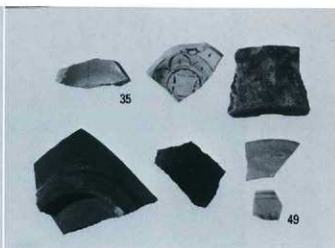
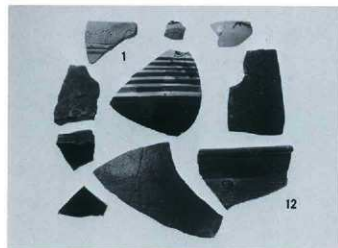
1.
Ⅱ区全景

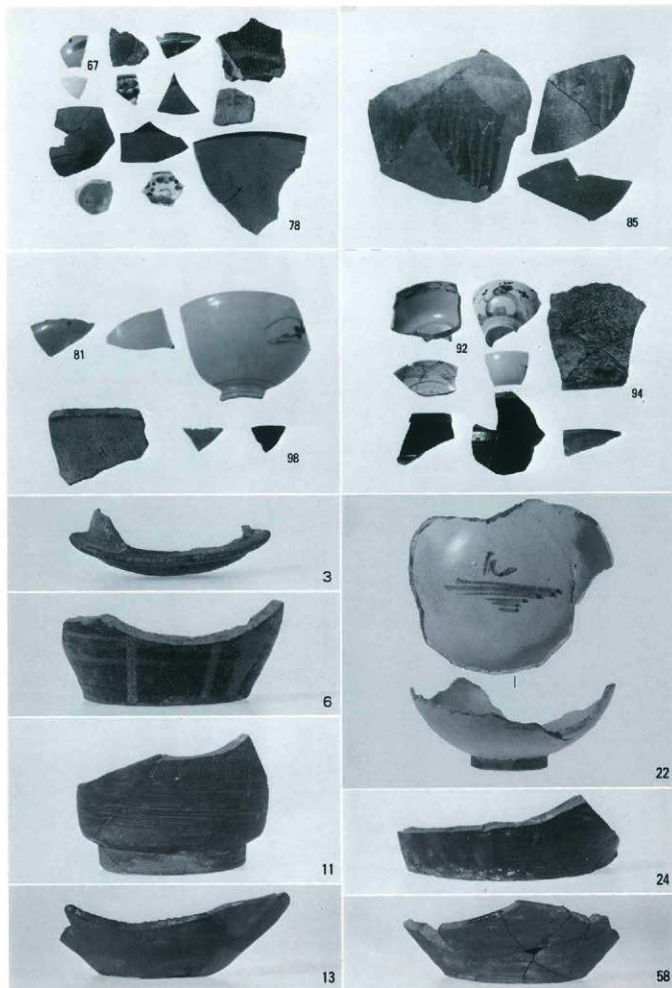


2.
Ⅱ区
(北から)



3.
Ⅱ区SK31
(北東から)







53



69



85



93

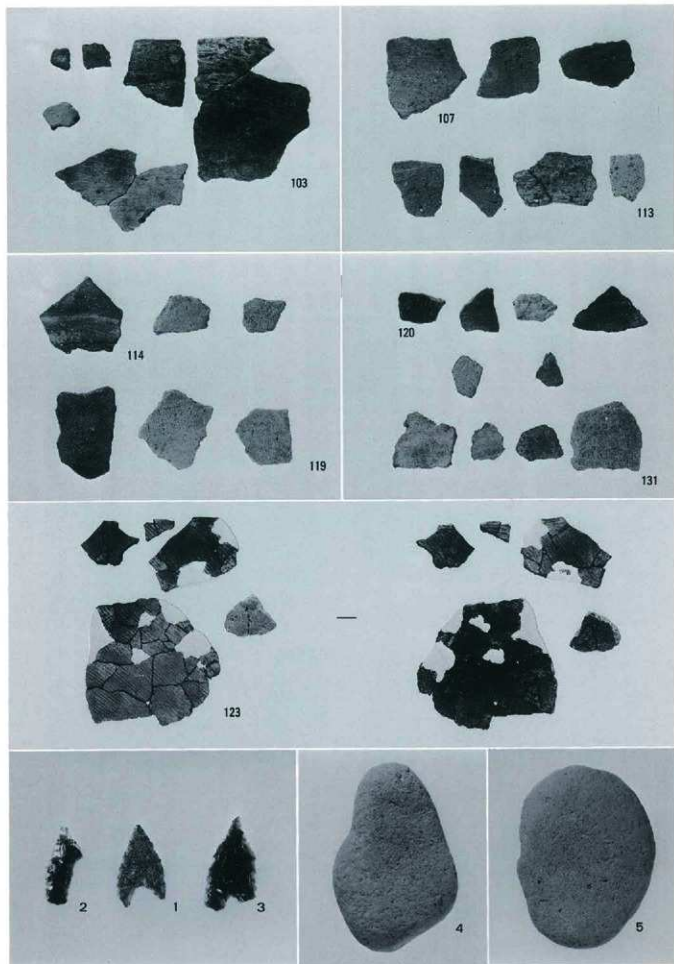


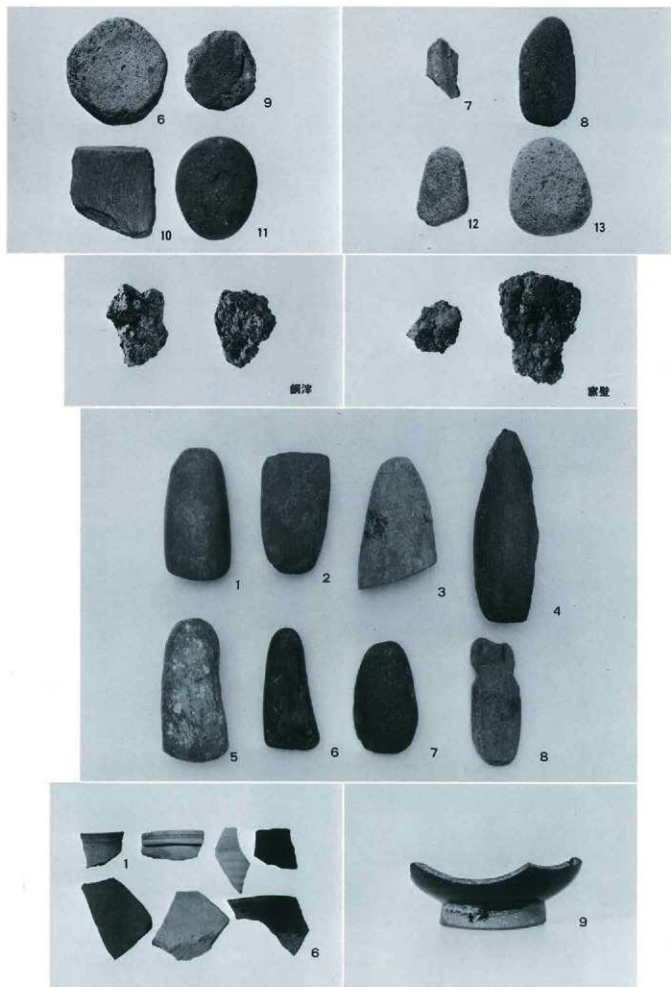
95



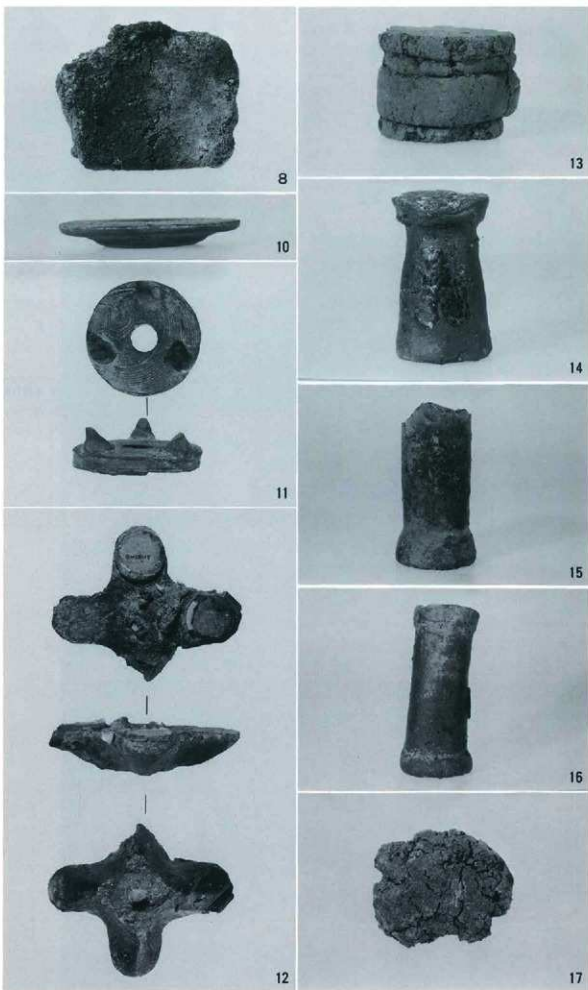
96

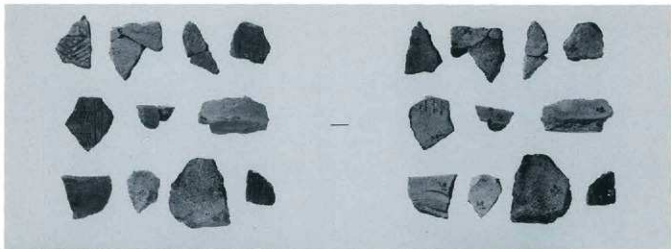






城ノ原遺跡出土遺物 5、大洲小学校所蔵石器、池の本・鹿子生焼窯跡採集遺物





2



3

1. 馬渡遺跡出土土器 2. 作業風景 3. われら総勢14人

報告書抄録

ふりがな	じょうのはるいせき						
書名	城ノ原遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	黒木町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第2集						
編著者名	伊崎俊秋						
編集機関 (発行機関)	黒木町教育委員会						
所在地	〒 834-12 福岡県八女郡黒木町大字桑原207 TEL 0943-42-1111						
発行年月日	西暦 1995年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
城ノ原	福岡県八女郡 黒木町大字大洞 4005ほか	405418	33° 10'	130° 44'	19940621 ～19940714	1,790	学校建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
城ノ原	集落	縄文前期 縄文晩期 近世	土壇 10基 掘立柱建物跡 2棟 石室 1基 土壇 22基 溝 1条		土器 土器・すり石・石鏝 陶磁器	18世紀頃の屋敷地	

城ノ原遺跡

黒木町文化財調査報告書

第2集

1995(平成7)年3月31日

発行 黒木町教育委員会

福岡県八女郡黒木町大字桑原207

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区赤坂1丁目8-34

電話 092(751)7431